

- 四 会議の経過
- 五 条約批准関係（条約実施関係を含む）
- 六 英仏伊海軍交渉関係
- 七 浜口首相遭難関係

（以上 下巻）

一 ジュネーヴ軍縮会議後の情勢

1

昭和2年12月23日 田中外交大臣より
在パリ佐藤連盟事務局長宛（電報）

仏国側よりポール・ボンクール妥協案を基礎
とする意見交換方申入に対し海軍側諒承に
ついて

付記一

大正十五年十一月三日午後海軍大臣官邸にお
ける財部海軍大臣と仏国大使クロードとの
会談概要

二

昭和二年十二月十日在仏国大使館付古賀海軍
武官より大角海軍次官及び野村軍令部次長宛
機密三五番電

三

海軍問題につき協力したき旨の仏国軍令部第
二局長の打診に関し請訓について
同年十二月十二日在パリ連盟海軍代表より大
角海軍次官及び野村軍令部次長宛機密三番電
仏国海軍と出来る限り意見交換を行なう方得
策と思われる旨具申について

四

同年十二月十六日在仏国大使館付古賀海軍武
官より大角海軍次官及び野村軍令部次長宛機
密三六番電
仏国軍令部第二局長より聴取したその後の情

報報告について

五

同年十二月大角海軍次官より在仏国大使館付
古賀海軍武官宛電報

六

仏国海軍当局に対する応酬より訓令について
軍縮準備委員会における海軍問題の経緯

第二九号

本省 12月23日後3時発

貴電第六五号ニ関シ

仏国海軍側より古賀ニ対シ第二読会ニ於テ我方ト協調的態
度ニ出テムトスル趣旨ヨリ「ボンクール」妥協案ヲ基礎ト
シテ意見交換方申入アリタル次第ハ既ニ御存知ノコトト察
セラルル処右ニ関シ海軍ヨリ同武官ニ対シ両国今後ノ立場
ヲ拘束セサル了解ノ下ニ意見交換ヲナスニ異存ナキ旨ノ回
訓アリタリ御含マデ

（付記一）

大正十五年十一月三日午後 於大臣官邸

財部海軍大臣ト仏国大使「クロード」トノ会談概要

（註）先之仏大使ハ外務大臣ヲ訪ヒ寿府会議ニ於ケル日本海
軍ノ政策ニツキ質問スル所アリ外務大臣ハ海軍ノ問題ハ
財部海軍大臣ノ指示ニヨルモノナレハ海軍省ニテ聞カル

ルヲ可トスト答ヘタル結果仏大使ノ海軍大臣訪問トナリタルモノナリ
 仏大使ハ大使館付海軍武官「ロザチ」少佐ヲ同伴シ来リ
 仏大使ハ英語ニテ談シ海軍大臣ハ日本語及ヒ英語ヲ併用
 シ日本語ノ時ハ寺島副官其ノ大意ヲ仏訳シタリ

仏

日仏両国ノ関係ハ益々親善ニシテ両国ノ利益ハ相反スルモノナキモ目下寿府ニ於ケル軍縮準備委員会ニ於ケル海軍々備制限問題ニツキニ説二分レ一ツハ英米ノ提案タル艦種別噸数説ト一ツハ仏ノ提案タル総噸数説トニシテ日本ハ英案ニ賛成セラレアル所仏案ノ方一層公平ニシテ日本ニ採リテモ不利ナラスト思ハルルカニ之ヲ對スル日本海軍政策ニツキテ御伺致度

日

御説ノ如ク日仏両国ノ親善ハ倍々深厚ナルヲ悦ビ居ルモ寿府會議ニ於ケル海軍制限ノ標準問題ニツキテ説ヲ異ニスルハ余ノ遺憾トスル所ナリ

仏

仏國ハ海岸及ヒ領土ノ防衛ノ為メニハ多数ノ小艦艇特ニ潜水艦ヲ必要トス日本モ亦御同様ナラント思ハル又他ノ小國ニ於テハ主力艦ヲ必要トセサルモノアリ各國ハ自國ノ安全ヲ主トシテ國防ヲ計画スルノ自由ヲ有セサルヘカラサルニ凡テノ國ニ艦種別ノ噸数制限ヲ行ハ

ト對立シテ日仏ノ關係ハ相似タルモノナリト思考ス

日

軍縮ノ實際問題トシテ我々ニ不公正ナル提案ヲナスモノアル時ハ我々ハ協同シテ論戦セサルヘカラサル場合アルヘシト余ハ考ヘ居レリ

仏

本國政府ヨリ送り来レル仏案ノ説明ハ貴大臣ノ御參考トシテ御贈リ申上クレハ御受納被下ルヘキヤ又今日ハ能ク御話ヲ承ルコトヲ得テ真ニ幸福ニ存スル所ナルカ今後モ問題ノアル場合巴里ノ「アッタッセー」ト仏海軍省トノ間ニモ連絡、會談ノ出来ル様致シ度存ス

日

大体ニ於テ御意見ニ同意ナルカ欧州ニアル我委員モ同様ノ考ヲ以テ居ルコトト信スルモ尚必要アル場合ニハ御來意ヲ通知致スヘシ

仏案ノ説明書御送付被下レハ喜ンテ御受致スヘク好キ參考資料トモナルヘシ然レトモ茲ニ特ニ言明シ置クヘキハ貴大使ト本官トノ會談ハ公式又ハ外交的ノモノニアラス私^{フヂヒシ}的^{フヂヒシ}ノ會談テアルコトテアル随テ御送付被下ルヘキ書類等ハ外務省ヲ經テ行ハレ度申添フ

仏

委細承知仕レリ書類ハ外務省ヲ經テ差出スヘシ御厚意深ク感謝ス

ントスル英案ハ公平トハ認メ難シ總噸数ヲ制限シテ其ノ範圍内ニ於テ各國ニ自由ヲ与ヘテ國防ヲ行ハシムルヲ可ナリト思フ

日

御説ハ理論上又ハ理想上尤モト存セラルルモ實際問題トシテハ既ニ華府ニ於テ戰艦、航空母艦等ノ制限ハ協定セラレ條約トシテ實現セルモノアリ帝國モ之カ為メ多大ノ犠牲ヲ払ヒ之カ実行ヲナシタルモノニシテ帝國政府ハ此ノ成果ヲ空シクスルコト能ハス此ノ條約ハ保持スル方帝國ノ利益ト考フルモノテアル華府會議ニ於テ定マラサリシモノニ就テハ更ニ公正ナル適當ノ協定ヲナシ度モノト思フ

仏

理想的ニハ仏案ノ良案タルモ實際上ニ困難アリトノ御説ヲ承リタルカ實際仏國ハ多数ノ駆逐艦及ヒ潜水艦ヲ必要トスルモノテ此等迄モ五、五、三、一・七五ノ比率ヲ以テ律スルコトハ到底忍フ能ハサル所テアル之ニ就テハ日本モ華府ニ於テ苦キ經驗ヲ有セラルルコトテアルカ寿府ニ於テ若シモ華府條約ノ保持ト云フコトヲ認メタナラハ勢ヒ五、五、三、一・七五ノ比率モ亦付随シテ来ル憂カアルト思ハレル此ノ際「アングロサクソン」

(欄外注記)

仏國大使ヨリ十一月五日付ニテ外務省ヲ經由シ送付シ来レリ

(付記二)

機密三五番電(極秘) (十二月十三日外務省寫接受)

十二月六日仏國海軍省側ト會食ノ機會ニ軍令部第二局長ヨリ昨年末財部大臣對「クロードル」大使會見ノ意味合ヒニ於テ軍縮問題ニ就キ内密ニ懇談シ度旨申込ヲ受ケ翌七日午後彼ト會見セル処左記要領ノ談合ヲ受ケタリ之ニ對シ小官ハ御話シノ次第ハ之ヲ東京ニ報告スヘシト答ヘ置ケリ右ニ付仏國海軍省側ニ回答スヘキ要旨並ニ小官心得ニ就キ御訓令ヲ仰ク尚本件加藤代表河合代理大使承知、軍令部第二局長談話ノ要領左ノ如シ

予ハ海軍軍備縮小問題ニ関シ貴官ト極内密且ツ非公式ニ懇談スヘク軍令部長ノ内命ヲ受ケ次ノ事ヲ御話ス

一、寿府ニ於ケル仏國海軍委員ノ報告ニ依リ海軍軍備縮小問題ニ関スル日本委員(海軍、外務側ヲ含ム)ノ意向ハ大体ニ於テ仏案即チ「ポールボンクール」妥協案ニ御同意ナルヤニ承知シアリ又昨年十一月東京ニ於テ貴大臣對全權大使會見ノ際ハ「軍備縮小ノ實際問題ト

(注) ボール・ボンクール案の中の海軍軍縮関係は、次のとおりである。

SECTION II. — NAVAL ARMAMENTS.

Article NA.

(French Draft.)

The limitation of naval armaments agreed to by each of the High Contracting Parties is shown in the annexed Table X.

The figures in column I of this table represent the total tonnage that each of the High Contracting Parties considers it essential to attain for the purposes of security and the defence of its national interests.

The figures in column II represent the total tonnage that each of the High Contracting Parties considers it necessary to complete before the expiry of the Convention.

The figures in column III represent, for each of the High Contracting Parties the division of the total tonnage stated by it in column II into total tonnage

シテ日仏ニ不公平ノ提案ヲナスモノアルトキハ吾々ハ協同論戦セサルヘカラスト考ヘ居ルモノナリ」トノ貴大臣ノ御言葉モアリ尚「今後同問題ニ関シテハ巴里大使館付海軍武官ト仏国海軍トノ間ニ連絡会談出来得ル様致度」トノ仏国大使申出デニ対シテハ御同意ヲ得シコトアリ

二、依テ仏国海軍トシテハ両海軍ノ親善関係ヲ益々深厚ナラシムルト共ニ是等軍縮問題ニ関シテハ日仏両海軍ニ於テ出来得ル丈ケ意見ノ交換ヲ行ヒ相近シキ得ル点ヲ見出シ置キ来年三月連盟軍備縮小会議ニ当ル事ヲ得ハ甚タ幸ナリト考ヘアル次第ナリ仏国海軍ノ次期連盟軍備縮小会議ニ対スル提案トシテハ「ボールボンクール」妥協案^(注)(連盟月報一九二七年五月十五日付一一〇乃至一一一頁)ヲ最良ト信シ之ヲ変更セサル考ヘナル所右案ニ対スル日本海軍ノ御研究具体的御所見ヲ承ル事ヲ得ハ最モ幸トスル所ナリ

三、猶本件ニ関シ仏国大使ハ昨年ノ如ク東京仏国大使ト貴海軍大臣トノ会見意見交換方今後八日以内位ニハ外交路ヲ経テ申出シル手筈ナリ

十日

by groups.

These total tonnage groups apply to all ships of a similar nature in the following manner : (a) capital ships ; (b) aircraft carriers ; (c) surface ships of less than 10,000 tons ; (d) submarines.

Each of the High Contracting Parties, while keeping within the limits of total tonnage stated in column II, can alter such division as it deems necessary for its security, subject to informing the Secretariat of the League of Nations of the changes brought to the division of its total tonnage, at least one year before laying down the portion of the tonnage which is to be transferred.

Note : Each of the High Contracting Parties states in column III the division of its total tonnage, either into the four groups of vessels as stated in paragraph 4, or only into those groups which it considers necessary for its needs of security.

TABLE X.
ANNEX TO ARTICLE NA. OF FRENCH DRAFT.
Total Tonnage of Warships.

I. Tonnage essential for the purposes of security and the defence of national interests	II. Tonnage to be completed before the expiry of the Treaty	Total tonnage of			
		Division into total tonnage by groups of the total ton- nage stated in column II.			
		Capital ships	Air-craft carriers	Vessels under 10,000 ton	Submarines
		a.	b.	c.	d.

(付記III)

機密三番電 (極秘) (十二月十三日海軍省着)

十二月十日在仏大使館付武官發電次官、次長宛第三五番電ニ関シ御参考迄ニ申見左ノ通

今回寿府ニ於テ軍備縮小準備委員会開催中十二月三日国際連盟仏国海軍委員「ドルーズ」海軍中佐ハ小官等ヲ午餐ニ招キタル席上同官ハ次回軍備縮小準備委員会ニ於テ仏ハ従来ノ仏案「ボールボンクール」案ヲ変更セサル考ヘナル処日本案ハ右ト大差無キモ之ニ反対ナル大国(英

国、伊国ノ意ナラン）アリ尚議論少カラサルヘシトノ内話アリタリ又今回仏国海軍省第二局長ヨリ在仏大使館付武官ニ懇談ノ事実モアリ海軍軍備縮小ニ関シ仏国海軍ハ帝国海軍ト相当予備的内協議ヲ遂ケ置キ次回会議ニ於テ艦艇制限方式ニ何トカ日鼻ヲ付クル為便宜ヲ得ントスルノ考ヘナルコトハ明カニ付軍備縮小準備委員会第三回本会議経過報告書（八月十日付次官、次長宛）三十六頁仏国提案ニ対シ帝国代表ヨリ修正意見ヲ提出セル事実ヲモ参照セラレ此ノ際仏国海軍ト出来得ル丈ケ意見交換ヲ行ヒ置クコト来年三月軍備縮小準備委員会ニ臨ムニ方リ好結果ヲ齎スモノト思考ス

本電古賀武官承知

十二日

（付記四）

機密第三六番電（極秘）

往電第三十五番電ニ関シ其ノ後軍令部第二局長ヨリ聞ク処左ノ如シ

一、国際連盟英国海軍代表「ケレー」中將十一月二十九日仏国海軍軍令部長ニ会見ヲ求メ海軍軍備制限問題ニ関シ

セシニ同局長ハ左ニアラス目下ノ処原案ヲ変更セスト云フニ過キス日本案ハ大体仏案ト同主義ニ立脚セルモノナルヲ以テ今後意見交換ノ上日本側ト協調ノ為要スレハ相当変更ヲナスニ素ヨリ答ナルモノニアラサルヘシト自分ハ承知シ居レリト答ヘタリ

第三十五、第三十六番電報ノ件ハ当大使館側ヨリ我外務省ニ通シアラサルヲ以テ貴方ニテ連絡方然ルヘク御取計ヲ乞フ

十六日

（欄外注記）

十二月十九日海軍省杉山中佐ヨリ

（付記五）

極秘

貴電三五番電ニ関シ貴官ハ左記要旨ニ依リ適宜応酬セラレ度

但軍備制限問題ニ関シ帝国カ常ニ公正不偏ノ態度ヲ採リ来レルハ御承知ノ通ニテ将来ニ於テモ此ノ方針ハ変更セラルルコトナシ而シテ制限方式ニ関シ英米モ総噸数制限ニ同意スルニ於テハ我国ハ強テ之ニ反対スルモノニ非サルモ本問

約二時間ニ亘リ意見ヲ交換シタルカ両者各々今春第一読会ニ提出シタル自国案ヲ固執シ何等了解点ヲ見出ス事無ク立チ別レタリ本会見ニ於テ英代表ハ自国案説明ニ於テ言ヲ左右ニ托シ真摯ナル態度ヲ採ラス少カラス仏国海軍軍令部長ノ感情ヲ害シタルモノノ如ク因ニ「ケレー」中將ハ千九百十四、十五年ノ交巴里大使館付武官タリシ人ニシテ個人トシテハ仏国海軍軍令部長以下多数海軍士官ニ親交アリト

二、往電第三十五番第三号在東京仏国大使ト我海軍側トノ会見ハ去ル十二月二日仏国海軍省ヨリ仏国外務省ヘ其正式申込ヲ為シタリ右会見ハ本年中ニ行ハレルカ来年ナルカ不明ナルモ三月開会迄ニハ篤ト意見ヲ交換スル充分ノ余裕アル次第ナリ

三、本件ニ関シ日仏海軍ノ交渉ハ申ス迄モ無キ事ナカラ他国ニ対シ秘密ヲ保チタシ

四、前記及今回古賀ノ聞クトコロニ依レハ仏国海軍自国案ヲ固執シテ一步モ譲ラストノコトナルカ斯クテハ日本海軍ニ於テ仏国海軍案ニ対シ何等カノ意見アリトスルモ夫レニハ単ニ貴方ノ参考ニ止マル次第ナルヤト試ミニ質問

題将来ノ推移予想困難ナル今日ニ於テ某国ト特殊ノ了解ヲ遂ケ相提携シテ来ルヘキ軍縮準備會議ニ臨マントスルカ如キコトハ帝国ノ希望セサル所ニシテ從テ此ノ際仏国海軍トノ意見交換ハ余リニ深入リシテ将来脱シ難キ拘束ヲ貽スカ如キコトナキヲ可トスル当方ノ意見ナリ貴官心得迄ニ

（応酬要旨）両国海軍ノ親善關係ヲ益々深厚ニシ且軍縮協約ノ成立ヲ希フ誠意ニ於テハ全然御同感ナルモ昨年末財部前大臣ノ貴国大使ニ対スル内談ノ如ク既ニ成立セル華府条約ノ効力ヲ殺キ若ハ理論上ハ根拠アルモ実行困難ナルカ如キ案ニハ日本海軍ノ同意シ難キ所ニシテ尚又今日迄ノ研究ノ結果ニヨレハ其儘直ニハ「ポールボンクル」妥協案ニ同意ヲ表シ難キヲ遺憾トス尤モ同案ニ我修正意見ノ如ク「本条約ノ規定ハ現存条約又ハ将来締結スヘキ条約ニ於テ一部締約国間ニ右表ニ掲クル艦種別噸数ヲ変更セサルコトヲ約スルヲ妨クルコトナシ」ト云フカ如キ趣意ノ但書ヲ付スレハ実質上ニ於テ同案ハ我主張タル艦種別制限方式ト略々一致シ且ツ仏国海軍ノ主張ト甚シク隔離スルモノトモ認メラレサルヲ以テ右趣意ニ拠リ其ノ結果カ将来両国ノ立場ヲ拘束スルコトナキ了解ノ下

ニ古賀武官ヲ通シ意見ノ交換ヲ行フコトニ異存ナシ
右依命

本件外務省ト打合済尚本件ニ関シ当地仏大使ヨリ未タ何等
申入ナシ

本電加藤少将ヘ転電アリタシ

注 本電報の冒頭に左の注記がある。

- 一 十二月二十二日午前佐藤軍務局第一課長持参
- 二 海軍省ニ同意ノ旨通知スミ

(付 記六)

海軍次官及軍令部次長宛機密第三五番電及機密第三番電ニ
関シ

一、軍縮準備委員会第一小委員会(軍事)ニ於ケル海軍制
限方式ニ関シ艦種別制限方式ヲ唱フル日、英、米、智利
「アルジェンチン」ト総噸数制限方式ヲ主張スル仏伊等
トハ終始相抗争シテ下ラサリシカ在京仏国大使「グロー
デル」ハ昨年十一月三日海軍大臣ヲ来訪シ全噸数說ノ利
点ヲ挙ケ日本側ニ於テ仏案ヲ支持セラレムコトヲ慫慂セ
リ右ニ對シ海軍大臣ハ「我々ニ不公正ナル提案ヲナスモ
ノアルトキハ我々ハ協同シテ論戦セサルヘカサル場合
アルヘシ」ト述ヘ「貴大使ト本官トノ会谈ハ私的ノモノ

妨ケサルコトニ且本国、植民地ノ區別ヲ撤スルコトニ修
正セムコトヲ提議シタルモ英米兩國側即決ヲ肯セス遂ニ
一切ノ決定ヲ昭和三年三月開催セラルヘキ準備委員会ニ
譲レリ

(註) 「ボール・ボンクール」妥協案

- 2 昭和3年2月27日 田中外務大臣より
在パリ佐藤連盟事務局局長宛(電報)

軍縮準備委員会における海軍軍備制限の方針 に関する訓令について

本省 2月27日後5時10分發

第三号

海軍代表發海軍次官宛機密第一番電ニ関シ

一、仏案ニ對スル我修正意見ハ實質上帝国從來ノ主張タル
艦種別制限方式ト略々一致スルモノナルハ海軍次官發古
賀宛官房機密第二五四番ノ通ナルモ要スルニ我方主張ノ
趣旨ヲ捨テサル程度ノ調停案トシテ提示セルモノニシテ
我方本来ノ主義ヲ改変スルノ意ニアラス英米ノ意向判明
セサル内我方ヨリ進ムテ修正案ノ要旨ヲ主張スルハ帝国
カ從來ノ主義ヲ變更シテ仏国ト提携セルヤノ感ヲ与フル

ニシテ本件ニ関シ御送付アルヘキ書類ハ外務省ヲ經テ行
ハレ度シ」トナシタリ因テ仏国大使ハ外務大臣ヲ来訪シ
同シ趣旨ヲ繰返シタリ

二、仏国側ハ全噸数制限方式ヲ其儘主張スルノ不可能ナル
ヲ察シ本年三月ヨリ四月ノ軍縮準備委員会ニ於テハ之ニ
些カ變更ヲ加ヘ(一)各国ノ安全及利益防護ニ欠クヘカラサ
ル總噸数(二)軍縮条約実施中達シ得ヘキ最大噸数(三)右(二)ノ
噸数ヲ(イ)主力艦(ロ)航空母艦(ハ)一万噸以下ノ水上艦艇(ニ)潜
水艦ニ分チ但右配合ハ連盟事務局ニ對スル一ヶ年ノ予告
ヲ以テ之ヲ變更シ得ルコトトシ右制限ヲ本国及植民地ノ
二ニ分チテ適用スルコトニ修正セリ(註)然レトモ英國側
ハ之ヲ以テ全噸数制限方式ノ「カムフラージュ」ニ過キ
スト痛撃シ事態再ヒ紛争セシヲ以テ佐藤公使ハ仏案ノ認
ムル艦種別区分ニ對スル變更ノ自由ハ主トシテ欧州ニ関
スル問題ナレハ日本トシテハ之ニ對シ意見ヲ表明ヲ差控
フヘキモ仏案ノ(一)及(二)ハ之ヲ合シテ条約期間中各国ノ所
有シ得ル最大噸数トシ(三)ノ艦種別ヲ一ヶ年ノ予告ヲ以テ
變更シ得ルコトノ規定ハ特定国間ニ締結シ又締結セラルヘ
キ他ノ条約ニ依リ右特定国間ニ適用セサル旨規定スルヲ

ノ嫌アルニ付前回ノ如ク特ニ必要アル場合ニ限り提示ス
ルニ止メラレ度シ

二、補助航空母艦ヲ将来制限外ニ置クコト並水上補助艦ト
シテ巡洋艦驅逐艦ト混合セシムルハ共ニ帝国ノ立場上不
得策ニシテ適當ノ時機ニ於テ巡洋艦驅逐艦以外ニ於テ制
限スルヲ必要ト認ム尤モ今日ノ狀勢ニ於テハ未タ我方ヨ
リ進ムテ之ニ触ルヘキ時機ニハアラスト思考スル処若シ
類別決定ノ問題起リタルトキハ右帝国ノ立場ヨリ見タル
要求ト及華府条約規定事項トノ境界ヲ明確ニシ且補助艦
ハ飽ク迄補助艦トスル從來ノ方針トニ基キ大正十三年石
井大使宛第四〇五号(註)ノ主旨ニ遵ヒ一万噸以下ノ水上補
助艦及潜水艦ト並ムテ一万噸以下ノ補助航空母艦ナル新
類別ヲ設クルコトニ努メラレ度ク一般ノ情勢之ヲ許ササ
ルニ於テハ最後案トシテ航空母艦ヲ更ニ華府条約ニ依ル
一万噸以上ノモノト一万噸以下ノ補助航空母艦(飛行甲
板ヲ有スルモノ)トニ細別スルコトニ讓歩セラルルモ差
支ナシ

三、本電海軍代表ヘ伝達アリ度シ

(編者注) 日本外交文書大正十三年第二冊、一三四—一三五

3 昭和3年2月27日

出淵外務次官
在本邦仏国大使 会談録

軍縮準備委員会に仏国より提出の妥協案への

好意的配慮方要望について

海軍軍備制限問題ニ関シ仏国大使ト会談ノ件

昭和三年二月二十七日仏国大使「ド・ビイユ」氏出淵次官ヲ来訪セル際次官ヨリ先般貴大使来訪ノ際本国政府ヨリノ通報ニ基ク趣ヲ以テ昨年夏「ジュネーヴ」ニ於テ海軍制限ニ関スル三国会議ヲ催シタル折日本全権側ノ某氏ハ仏国側ノ某氏ニ向テ日本国ハ「ボール・ボンクール」妥協案ニ同意シ得ヘキコトヲ漏シタル旨ヲ語ラレタルニ付爾来折角各種ノ報告ニ基キ調査ヲ遂ケタルニ日本全権側ノ某氏ニ於テ前記ノ如キ意向ヲ表明シタルコトニ付テハ何等ノ事実ヲモ確ムルコトヲ得ス尤モ客年四月国際連盟軍備縮小会議準備委員会ニ於テ仏国側ヨリ其ノ従来固執シ来レル全噸数制限方法ニ若干ノ変更ヲ加フル妥協案ヲ提出セラレタル際我カ佐藤代表ニ於テ仏国側ノ妥協的精神ヲ多トスル旨会議ノ席上ニ於テ述ヘタルコトアルモ同時ニ佐藤代表ヨリ右仏国ノ

テ引取リタリ

出淵次官口述速記

4 昭和3年2月28日

在本邦英国臨時代理大使より
田中外務大臣宛

連盟軍縮準備委員会に主力艦問題を提起の意

向ヒハシム

(copy) Aide-mémoire.

His Majesty's Government in Great Britain intend to revert to question of capital ships at the forthcoming session of the League of Nations preparatory committee on disarmament. In view, however, of the imminent approach of the Presidential elections in the United States of America they do not expect any final decision in the sense of an immediate modification of the Washington Treaty. They only intend in the committee to allude to their proposals in broad terms as representing a contribution of importance towards a general reduction of armaments.

The presence at Geneva of representatives of the

妥協案ニ対シ若干ノ修正意見ヲ提出シ殊ニ一部ノ締約国間ニ於テ右仏国案ニ拘ラス艦種別噸数ヲ変更セサルコトヲ約スルヲ妨ケサルコトトスヘシトノ修正意見ヲ述ヘタリ右佐藤代表ノ修正意見ニシテ採用セラレンカ仏国側ノ意見ト我方ノ意見トハ大イニ接近スルコトナルヘシト信スト述ヘタルニ仏国大使ハ次官御説明ノ趣旨ハ篤ト了解セリ就テハ日本政府ニ於テハ結局若干ノ修正ニ依リ仏国妥協案ニ同意セラルヘキヤト反問シタルニ付次官ヨリ軍備縮小問題ハ元來極メテ複雑ニシテ且「デリケート」ナル関係ヲ有シ從テ之カ為メ国際連盟ニ於テ屢々會議ヲ重ネ各国間ニ意見ノ交換ヲ為シ又昨年「ジュネーヴ」ニ於テ三国会議ヲ開キタルモ遂ニ結果ヲ得ルニ至ラサリシ次第ナリ日本政府トシテハ軍備縮小問題ニ付テハ最モ重キヲ置キ居ルニ付今後ニ於テモ有ユル智恵ヲ絞リ關係各国トノ間ニ合意ヲ見出ス為メ努力スル決心ナルモ今日予メ帝國政府ノ態度ヲ「コミット」スルコトハ到底不可能ナルニ付其ノ点ハ十分御諒解アリ度シト述ヘタルニ仏国大使ハ成程御尤モノ次第ニ付此ノ際別段御約束ヲ取付ケンコトヲ試ミルコトハ為ササルヘキモ兎ニ角仏国ノ考案ニ対シ好意的態度ヲ示サレンコトヲ欲スト

Washington Treaty Powers offers an opportunity of which they hope to take advantage in order to discuss and agree on a fixed date for the advanced meeting contemplated at Geneva of the conference prescribed under paragraph 2 of Article 21 of Washington Treaty and to hold some informal exchange of views on elements of British proposals.

In the opinion of His Majesty's Government, the conference should assemble during the autumn of this year or at latest in the spring of 1929, after the Presidential election.

His Majesty's Government hope that the Imperial Japanese Government will instruct their representative at Geneva to support the British representative in securing this object and they are encouraged in this hope by their belief that the Imperial Japanese Government fully share their views that the question is one of paramount importance.

British Embassy,
Tokyo.

February 28th, 1928.

(編者注)

右覚書内容は三月三日、田中外務大臣発在英国松井大使宛
第二二号として發電された。

5 昭和3年3月3日

田中外務大臣より
在英国松井大使宛(電報)

連盟軍縮準備委員会に主力艦問題を提起の意
向の旨英国側より通報について

第二一号

客月二十八日在京英国代理大使来省別電第二二号ノ通覚書ヲ手交セルニ付次官ヨリ他ノ関係国就中米国ニ対シ何等カノ通牒ヲナシタルヤト質問シタルニ其迄ハ全然判明シ居ラサルニ付本国ニ電照ノ上回答スヘシトテ引キ取リタルカ本月二日右覚書ヲ取り消シ之ニ代ヘ公文ヲ以テ「英国政府ハ来ルヘキ軍縮準備委員会ニ主力艦問題ヲ提起スルノ意向」ナル旨本国政府ノ訓令ニ依リ通報シ来レリ
最初英国政府カ別電ノ通り提議ヲナシ乍ラ今急速之ヲ撤回

シ単ニ通告ニ止メタル真意乃至事情不明ニ付適當ノ機会ニ於テ御内查ノ上回電アリ度シ

米、仏、伊、寿府ニ転電アリ度シ

6 昭和3年3月26日

在パリ佐藤連盟事務局長より
田中外務大臣宛(電報)

軍縮準備委員会における英国代表の主力艦噸
数引下及び艦齡延長に関する提案について

パリ 3月26日後発
本省 3月27日前着

第三八号

軍縮準備委員会二十日ノ會議ニ於テ英国代表ハ「ソビエツト」提案ニ対スル意見ヲ述ヘタル際「ソ」代表カ大戰後海軍々縮事業ノ既ニ著シク進歩ヲ示セル事実ヲ無視スルハ誤レリト前提シ華府會議ノ成果ヲ略述シタル上英国政府カ他ノ華府條約締約國トノ協定ニ依リ主力艦ノ最大噸数引下及艦齡延長ニ向ヒ更ニ一步ヲ進ムルノ用意アルコトハ曩ニ声明セラレタル通ニシテ吾人ハ關係海軍國ニ於テ其時期到レリト思考セハ何時ニテモ之ヲ実行スルノ覚悟アリト述ヘタルカ同代表ハ二十四日午後本官其ノ他華府海軍條約締約國代表者ニ対シ右演說ノ趣旨ヲ敷衍説明スル意味ノ同文書翰

付屬書一 右英国代表演說抜萃

二 右英国代表來翰

普通聯本公第二〇一号

昭和三年三月二十七日

在巴里

國際連盟帝國事務局長 佐藤尚武(印)

外務大臣男爵 田中義一殿

主力艦問題英国提案ニ関スル軍縮會議準備委員会同国代表声明及書翰写送付ノ件

過般寿府ニ於テ開催ノ軍縮會議準備委員会ニ於テ英国代表ガ「ソヴィエト」提案ニ対スル意見開陳ノ際主力艦噸数引下及艦齡延長ニ関スル同国ノ提案ニ言及シ次テ會議最終日ニ至リ右提案ニ関スル説明的同文書翰ヲ華府海軍々備制限條約締結國代表ニ送付シ越セル次第ハ不取敢往電第三八号ヲ以テ報告ノ通ナルカ前記英国代表演說中本件ニ関スル部分抜萃(別紙甲号)及同代表來翰写(別紙乙号)茲ニ送付ス

追而右來翰ニ対シテハ本官ヨリ右受領ノ旨及帝國政府ニ傳達スヘキ旨回答シ置キタリ右為念申添フ

7 昭和3年3月27日

在パリ佐藤連盟事務局長より
田中外務大臣宛

軍縮準備委員会における主力艦問題に関する
英国代表演說抜萃及び書翰送付について

(左欄續I)

中 略

EXTRACT FROM THE SPEECH MADE BY
LORD CUSHENDUN AT THE FOURTH
MEETING OF THE FIFTH SESSION OF
THE PREPARATORY COMMISSION FOR
THE DISARMAMENT CONFERENCE.

(March 20th, 1928).

Now, as a representative of a Naval Power, I, of course, scrutinise particularly the articles dealing with naval armaments. I am not prepared summarily to reject them; some of them, I think, could obviously not be accepted in their present form, and to the full extent of the Russian proposals, but, without going so far as that, it is quite possible that these articles may be found to contain some valuable suggestions. For example, the British Government has already announced that it is quite prepared, in agreement with

other Powers, to agree to the total abolition of submarines. That is one of the proposals in the Soviet Draft. We have declared already that we are quite prepared for that, and I think it is quite likely—

though I cannot say definitely—that my Government might agree also to the total abolition of some of the categories of war material which are appended to Article II.

It is surely very unfair, when the hon. delegate for the Soviet Republic comes here and speaks in the very scornful way that he has done of the work hitherto accomplished by the League, to leave out of account altogether the very considerable progress that has been made. I could not help asking myself, when I listened to his words yesterday, whether he has ever heard of the agreement that was come to very shortly after the war at Washington. I shall be borne out by representatives of other Powers who took part in that Conference that very considerable progress was made,

falling short, of course, of what is now proposed by

the Soviet Republics but still, as compared with previous conditions, gratifying progress in the direction of naval disarmament, and even more recently my Government has let it be known that they are quite prepared to carry the Agreement there come to a little further. The enormous ships of modern times known as “Capital Ships” were at Washington agreed to be limited, or, at any rate, it was agreed to prevent a further growth of these enormous vessels. The British Government has said that they are quite prepared—in agreement, of course, and only in agreement with the other signatories of the Washington Conference—to take a further step in the direction of reducing the size of these enormously costly and powerful vessels, and also to increase the period which must elapse before they are replaced by new ships, and we are willing to do that at any time when the naval Powers concerned think that the time is oppor-

tune for some such move as that.

(左欄續II)

N 略

British Delegation,

Hôtel Beau Rivage,

GENEVA.

23rd March, 1928.

My dear Colleague,

You may remember that in a speech which I made last Tuesday in the Preparatory Committee on the scheme of the Soviet Government for immediate and complete disarmament, I was impelled to refer to the great progress in disarmament which had been achieved since the war—notably by the Washington convention. I referred to a statement, which had already been made by the British Delegation at the Naval Conference held in Geneva last year, showing that my Government were prepared, if the other signatories would agree, to carry even further certain of the principles of the

Convention, by reducing the maximum displacement of capital ships, and the calibre of their heaviest gun, and by extending the accepted life of vessels of that class.

Having referred in a somewhat incidental way which the character of my speech made unavoidable and in indefinite terms of these proposals, I should like to take this opportunity of reminding you, and my other colleagues representing Powers signatories to the Washington Convention, of their exact purport.

The proposals of my Government are, first, to reduce the size of any battleship to be built in the future from the present limit of 35,000 tons displacement to something under 30,000 tons; secondly, to reduce the size of guns in battleships from the present limit of 16 inches to 13.5 inches; and thirdly, to extend the accepted life of the existing capital ships from 20 to 26 years—this involving a waiver by the Powers of their full rights under the replacement tables

agreed upon at Washington. Such an arrangement would naturally have to provide for some little elasticity on each side of that figure.

It would obviously be of advantage, if such a step were agreed upon, that it should be taken in time to enable it to become effective before the commencement of the capital ship replacement programme which is provided for by the Washington Convention.

Believe me,

My dear Colleague,

Yours very sincerely,
(S.) Cushendun.

His Excellency

Monsieur Sato,

&c., &c., &c.,

昭和三年八月七日
吉田外務次官より
大角海軍次官宛

軍縮準備委員会より英仏海軍間妥協成案に關
する英國閣議の妥協提議に付

付記 英仏海軍間の妥協の要旨

条三機密第二〇五号

昭和三年八月七日

外務次官 吉田 茂(印)

海軍次官 大角岑生殿

軍縮準備委員会海軍事項ニ關スル件

本件ニ關シ今般在本邦英國代理大使ヨリ英仏両国間ニ妥協成立セル趣ヲ以テ別紙寫ノ通申越セルニ付委細右ニテ御了
悉ノ上何分ノ儀折返御回示相成度
(別紙)

British Embassy,

Tokyo,

August 2nd, 1928.

No. 110.

Your Excellency,

I have the honour by direction of His Britannic Majesty's Principal Secretary of State for Foreign Affairs to inform Your Excellency that as a result of preliminary conversations between His Majesty's

Government and the French Government they have agreed substantially to modify the position which they respectively held at the meeting of the commission in March 1927, and they have worked out proposals on the following lines which they are themselves ready to accept, and which they hope will serve to promote general agreement.

2. The limitations which the Disarmament Conference will have to determine will deal with four classes of men-of-war.

(1) Capital ships, i. e. ships over ten thousand tons displacement, or with guns of more than eight inch calibre.

(2) Air craft carriers of over ten thousand tons.

(3) Surface vessels of below ten thousand tons armed with guns of more than six inch or up to eight inch calibre.

(4) Ocean-going submarines, i. e. submarines of over six hundred tons.

3. As the Washington Conference regulates the limitations of ships in classes one and two, the Disarmament Conference will merely have to consider the method of extending these limitations to the Powers non-signatory to this Treaty.

4. His Majesty's Government and the French Government propose,

- (1) As regards classes three and four, the final Disarmament Conference shall fix the maximum tonnage applicable to all Powers which no Power will be allowed to exceed, for the total of vessels in each of these respective categories during the period covered by the Convention.
- (2) Within this limit each Power will indicate at the final Conference for limiting these categories, the tonnage they propose to reach and which they undertake not to exceed during the period covered by the Convention.
5. I am to express to Your Excellency the earnest

(欄外注記)

昭和三年八月四日午前英国代理大使来訪手交

(付記)

軍備縮小会議ノ為スヘキ制限ハ左記四艦種ニ関ス

- (1) 主力艦即一萬噸ヲ超ユル又ハ口径八吋ヲ超ユル備砲ヲ有スルモノ
- (2) 一萬噸ヲ超ユル航空母艦
- (3) 一萬噸又ハ一萬噸ヲ超エサル水上艦船ニシテ六吋ヲ超エ八吋ニ至ル口径ノ備砲ヲ有スルモノ
- (4) 大洋用潜水艦即六百噸ヲ超ユルモノ

華府条約ハ(1)及(2)類ノ制限ヲ規定シタルヲ以テ軍備縮小会議ハ単ニ右制限ヲ同条約ノ非署名国ニ之ヲ拡張スル方法ヲ審議スヘシ

- (3)及(4)類ニ関シ軍備縮小最終会議ハ一切ノ(締約)国ニ適用セラレ何レノ(締約)国モ条約所定期間中超過スルコトヲ許容セラレサル右各艦種ノ総噸数ノ最大限ヲ定ムヘシ、最大限度内ニ於テ各(締約)国ハ最終会議ニ於テ右艦種ノ各ニ付達セムトシ且条約所定期間中超エサルコトヲ約スル最大限ヲ指示スヘシ

hope of His Majesty's Government that the terms of the above compromise of hitherto divergent views may prove acceptable to the Imperial Japanese Government. They believe it to offer the best, if not the only prospect of making an advance from the present position, and they are confident that the Governments of other principal naval powers will examine it with the utmost sympathy.

6. As the meeting of the Preparatory Commission is to take place on September 3rd I should be grateful if Your Excellency would honour me with the views of the Imperial Government as soon as possible. I avail myself of this opportunity to renew to Your Excellency the assurances of my highest consideration.

His Excellency,
Baron Giichi Tanaka,
H. I. J. M. Minister for Foreign Affairs.

(編者注)

右電文は前出文書(英文)の前、後文を除いた部分の訳文である。

9 昭和3年8月9日 在イタリア松田大使より
田中外交大臣宛(電報)
英仏海軍協定に関する伊国新聞論調について

ローマ 8月9日後発
本省 8月10日前着

第八七号

英仏海軍協定ニ対スル当国新聞論調

(一)「ヴォチエ、デイ、ベルガノ」今日迄世界的ニ考慮セラレ世界各国ノ参加ヲ見スシテ取扱ハルヘカラストセラレタル問題ニ付単ニ二ヶ国間ニノミ協定ヲ見タル事実ハ英仏海軍協定ナルモノカ純然タル政治的性質ヲ有シ又現ニ両国間ニノミ関係シ且道德的普遍的価値ヲ欠ケルモノナル事ヲ示スモノナリ

(二)「トリブーナ」本紙ハ五日本協定ハ実質的価値尠ク恰モ昨年日英米カ寿府ニ於テ今回ノ協定ト同様形式ノ諒解ニ達シ乍ラ何等成就スル処ナカリシ如ク本協定モ何等達成スル処ナカルヘシト評シタルカ更ニ八日ノ同紙ハ英仏協

定ハ艦種別ニ依ル艦隊ノ吟味ニ対スル形式上ノ点以外何等価値アルヘント思考セラレス若シ連合シタル英仏ノ海軍力ノ配置ヲ包含ストセハ是華府条約カ日英同盟ヲ廃棄シ依テ以テ設定シタル勢力均衡ヲ破壊スルモノナリ輿論カ之ヲ重要視スルハ「チエンバーレン」ノ宣言並紙ノ注釈ニ依リ注意ヲ惹キツケラレタルカ為ニ外ナラストナ

英、仏、米へ郵送セリ

10 昭和3年8月11日
大角海軍次官より
吉田外務次官宛
英仏海軍協定についての対英回答方に関し海軍省の意見通報について

官房機密第九七二号

昭和三年八月十一日

海軍次官 大角 岑生 (印)

外務次官 吉田 茂殿

海軍軍備制限方式ニ関スル英仏妥協案ノ件

条三機密第二〇五号ヲ以テ御照会ノ首題ノ件ニ関シテハ英國政府ニ対シ左記要領ノ回答ヲナスヲ適当トスル当省ノ意

海軍次官發海軍代表宛電報ニ依レハ帝國政府ハ英、仏海軍妥協案ノ趣旨ニ賛同ノ旨不日英、仏側へ回答ノ御予定ナル趣ノ処次回連盟總會中本會議又ハ委員會ニ於テ本案ニ関シ我方ヨリ意見發表ヲ可トスルコトアルヘキニ付前記回答ノ時期及内容ニ関シ當方心得迄何分ノ儀御回電ヲ請フ
尤モ本件ニ関シ總會中我方ヨリ何等言及セサル考トセラルルニ於テハ右様取計フヘシ

12 昭和3年8月25日
田中外務大臣より
在英國佐分利臨時代理大使宛 (電報)

英仏海軍協定に関する対英回答の要領通報について

本省 8月25日後3時45分發

第九一號

本大臣發佐藤局長宛電報第一〇七号ニ関シ

在京英國代理大使宛回答案ハ已ニ大体決定シタルモ佐藤局長宛第一一八号ノ事情ニ依リ未發送ノ処同回答案主要部分左ノ通貴官御含ミ迄ニ申進ス追テ回答發送ノ上ハ電報スヘシ

英仏兩國ノ協定ニ係ル海軍軍備制限方式ハ從來各種提案ノ

見ニ有之候
右依命回答ス

記

英仏兩國ノ協定ニ係ル海軍軍備制限方式案ハ從來各種提案ノ間ニ存在セル合理性ト実行可能性トノ扞格ヲ良ク調和シ得タル良案ニシテ之ニヨリ華府會議以來失敗ヲ重ネタル補助艦制限問題モ漸ク解決ノ曙光ヲ認メ得ルニ至レルモノト謂フ可ク帝國ハ欣然本協定ノ趣旨ニ賛意ヲ表スルモノナリ然レドモ各國ニ一律ニ適用スベキ大型巡洋艦及潜水艦ノ最大限噸數ハ國費ノ節約ト國防ノ安固ノ兩見地ヨリ事情ヲ異ニスル各國ヲ満足セシムルモノタラザル可カラザルヲ以テ之ガ協定ハ最モ慎重公正ナルヲ要スルモノト認ム

11 昭和3年8月23日
在パリ佐藤連盟事務局長より
田中外務大臣宛 (電報)

英仏海軍協定への対処方に関し請訓について

パリ 8月23日後發
本省 8月24日前着

第一三五号

貴電第一〇七号ニ関シ

間ニ存在セル合理性ト実行可能性トノ扞格ヲ良ク調和シ得タルモノニシテ帝國ハ本協定ノ趣旨ニ賛意ヲ表スルモノナリ
然レトモ各國ニ一律ニ適用スヘキ大型巡洋艦及潜水艦ノ最大限噸數ハ國民負担ノ輕減ト國ノ安全ノ兩見地ヨリ事情ヲ異ニスル各國ヲ満足セシムルモノタラサル可カラサルヲ以テ之ガ協定ハ最モ慎重公正ナルヲ要スルモノト認ム
連盟、米、伊ニ轉電シ連盟ヨリ仏ニ轉達セシメラレ度シ

13 昭和3年8月25日
田中外務大臣より
在パリ佐藤連盟事務局長宛 (電報)

英仏海軍協定への対処方に関し回訓について

本省 8月25日後3時45分發

第一一八号

貴電第一三五号及本大臣發英宛第九一號ニ関シ帝國政府ノ意向ノ大体ハ已ニ本大臣ヨリ在京英仏大使ニモ内話シオキタル次第ナルモ米國方面ニ於ケル本協定ニ関スル輿論ニ鑑ミ此際直チニ本邦カ正式回答ヲ發スルコトハ或ハ華府海軍協定期間ニ「ブロック」ヲ作ルカ如キ感ヲ与ヘ米國等ノ輿論ニ惡影響ヲ及スコトヲナキヤヲ懸念シ差控居ル次第ナリ

就テハ貴官ニ於テモ右ノ御含ヲ以テ必要ニ応シ可然英仏委員等ニ接触セラレ度シ

英米伊ヘ転電シ仏ヘ転達セラレ度シ

14 昭和3年9月4日 田中外務大臣より
在米国沢田臨時代理大使宛（電報）

英仏海軍協定に関する我が対英回答内報方に
ついて

本省 9月4日後3時10分發

第二〇二号

英宛往電第九一号ニ関シ七日対英回答發送ノ答ナルニ付右回答ノ要旨貴任国政府ニ参考トシテ内報相成度同時ニ貴任国政府ノ英仏協定ニ対スル意向決定次第内報ヲ受ケタキ旨申入レラレ度シ
本電本大臣ノ訓令トシテ伊ニ転電シ伊ヲシテ英仏寿府ニ参考トシテ転電セシメラレ度シ

15 昭和3年9月4日 田中外務大臣より
在ジュネーヴ佐藤連盟事務局長宛
（電報）

英仏海軍協定に関する我が回答仏国側へ通告

方について

別電 九月四日田中外務大臣より在ジュネーヴ佐藤連盟事務局長宛第二一号
英仏海軍協定に関する仏国側への回答文

第二〇号 本省 9月4日後4時30分發

本大臣發在英佐分利代理大使宛電報第九一号及貴電第一一六号ニ関シ対英回答ハ七日發送ノ答ナル処別電第二一号可然仏国側へ通告アリ度シ案文海軍ト協議ス

（別電）

第二一号

Le Gouvernement japonais accepte en principe la proposition franco-britannique sur la limitation d'armements navals qui lui semble avoir réussi à concilier le côté logique et le côté pratique offerts par les diverses propositions qui ont été mises en avant.

Il tient toutefois à faire observer que le maximum du tonnage des grands croiseurs, applicable d'une façon uniforme à toutes les Puissances, et celui des sous-marins, d'application identique, doivent être de

英仏海軍協定に關シ英仏兩國側へ回答済の旨

通報について

付記 九月七日田中外務大臣より英國臨時代理大使宛条三機密第一二六号

英仏海軍協定に關する對英回答

機密第二二三五号 （九月十日發送済）

海軍軍備ニ關スル英仏妥協案ノ件

首題ノ件ニ關シ本年八月十日付官房機密第九七二号ノ二ヲ以テ御回答ノ次第有之タル処九月七日別添写甲号ノ通在本邦英國代理大使ニ回答シ尚在寿府佐藤帝國連盟事務局長ヘモ別添写乙号ノ通電報シ右仏国側ニ可然通告方訓令シオキタルニ付右ニ御了承相成度此段申進ス

（付記）

条三機密第一二六号

以書翰啓上致候陳者八月二日付貴翰ヲ以テ英仏兩國政府ハ兩國間ニ於ケル予備的交渉ノ結果千九百二十七年三月國際連盟軍縮準備委員會ニ於ケル兩國各自ノ主張ヲ實質的ニ變更スルコトニ合意シ左ノ提案ヲ作成シタル旨並右ハ兩國政府ニ於テ受諾ノ用意アルモノニシテ且一般協定促進ニ資セ

1 ジュネーヴ軍縮會議後の情勢

第九八号

米宛往電第二〇二号ニ関シ対英回答ハ佐藤局長宛第一一八号ノ次第モアリ發送後モ当分外部ニ秘シ本件ガ新聞ノ問題トナラヌ様致度キニ付貴方ニ於テモ其積リニテ処理セラレ度シ

米仏伊寿府ヘ転電アリ度シ

17 昭和3年9月10日

吉田外務次官より
大角海軍次官宛

ムコトヲ希望スル旨帝國政府へ通報セラルルト共ニ本提案ニ対スル帝國政府ノ意見御問合相成敬承致候

一、軍備縮少會議ノ決定スヘキ制限ハ四種ノ軍艦ニ関スルモノトス

(1) 主力艦即排水量一万噸ヲ超ユル又ハ口径八吋ヲ超ユル備砲ヲ有スル艦船

(2) 一万噸ヲ超ユル航空母艦

(3) 一万噸以下ノ水上艦船ニシテ口径六吋ヲ超エ八吋ニ至ル備砲ヲ有スルモノ

(4) 大洋用潜水艦即六百噸ヲ超ユル潜水艦

二、華盛頓會議ハ(1)及(2)艦種艦船ノ制限ヲ規定セルヲ以テ軍備縮少會議ハ単ニ右制限ヲ同条約非署名国ニ拡張スル方法ヲ審議スヘシ

三、英國政府及仏國政府ハ左ノ如ク提案ス

(1) (3) 及(4) 艦種ニ関シ軍備縮少最終會議ハ一切ノ国ニ適用セラレ何レノ国モ右艦種毎ニ艦船ノ全部ニ付条約期間中超過スルコトヲ許容セラレサル最大限噸数ヲ定ムヘシ

(2) 右艦種制限ニ関スル最終會議ニ於テ各国ハ前項ノ制限

英仏海軍協定に関する米國政府の対英回答送

付について

付屬書

英仏海軍協定に関する米國政府の対英回答

付記

英仏海軍協定に関する伊國政府の対英回答

訳文

機密公第四八七号

昭和三年九月廿八日

在米

臨時代理大使 沢田 節藏 (印)

外務大臣男爵 田中義一殿

英仏海軍協定ニ関スル米國政府ノ対英

回答全文送付ノ件

英仏海軍協定ニ関スル米國政府ノ対英回答ハ其ノ大要電報シ置キタルカ右回答全文写一部茲ニ送付ス

本信写送付先 英、仏、伊、連盟事務局

(付屬書)

The Government of the United States has received from His Majesty's Government a communication summarizing the understanding reached between the

内ニ於テ其ノ到達セムトシ且条約期間中超過セサルコトヲ約スル噸数ヲ表示スヘシ

公正ナル軍縮協定ノ成立ニ対シ真摯ノ努力ヲ惜マサルハ帝國政府ノ終始一貫セル方針ナル処今般英仏両國協定ニ係ル海軍軍備制限方式ハ從來各種提案ノ間ニ存在セル合理性ト実行可能性トノ扞格ヲ良ク調和シ得タルモノニシテ帝國政府ハ本協定ノ趣旨ニ賛意ヲ表シ候

然レトモ各国ニ一律ニ適用スヘキ大型巡洋艦及潜水艦ノ最大限噸数ハ國民負担ノ輕減ト国ノ安全ノ兩見地ヨリ事情ヲ異ニスル各国ヲ満足セシムルモノタラサル可カラサルヲ以テ之カ協定ハ最モ慎重公正ナルヲ要スルモノト認メ候

右回答申進旁本大臣ハ茲ニ重ネテ貴下ニ向テ敬意ヲ表シ候 敬具

昭和三年九月七日

外務大臣男爵 田中 義一

大不列顛臨時代理大使

セシル、ドーマー 貴下

18 昭和3年9月28日

在米國沢田臨時代理大使より
田中外務大臣宛 (電報)

British and French Governments as to a basis of naval limitation, which agreement, it is stated, will be submitted to the next meeting of the Preparatory Commission for the Disarmament Conference.

The Government of the United States is willing to submit certain suggestions as to the basis of naval limitation as summarized in the British note. From the Communication of the British Government it appears that :

“The limitations which the Disarmament Conference will have to determine will deal with four classes of men-of-war :

(1) Capital ships, i. e., ships of over 10,000 tons or with guns of more than eight inch calibre.

(2) Aircraft carriers of over 10,000 tons.

(3) Surface vessels of or below 10,000 tons armed with guns of more than six inch and up to eight inch calibre.

(4) Ocean going submarines over 600 tons.”

As the Washington Treaty regulates the first two classes that is, capital ships and aircraft carriers, the Preparatory Commission will have to consider only the last two categories so far as the signatories of that treaty are concerned.

From the foregoing summary of the agreement it appears that the only classes of naval vessels which it is proposed to limit under the Franco-British draft agreement are cruisers of or below 10,000 tons, armed with guns of more than six inch and up to eight inch calibre, and submarines of over 600 tons. The position of the Government of the United States has been and now is that any limitation of naval armament to be effective should apply to all classes of combatant vessels. The Franco-British agreement provides no limitation whatsoever on six inch gun cruisers, or destroyers, or submarines of 600 tons or less. It could not be claimed that the types of vessels thus left without limitation are not highly efficient fighting

ships. No one would deny that modern cruisers armed with six inch guns, or destroyers similarly armed, have a very high offensive value, especially to any nation possessing well distributed bases in various parts of the world. In fact, such cruisers constitute the largest number of fighting ships now existing in the world. The limitation of only such surface vessels as are restricted in Class 3 of the draft agreement, that is cruisers of or below 10,000 tons, armed with guns of more than six inch and up to eight inch calibre, would be the imposition of restrictions only on types peculiarly suited to the needs of the United States. The United States can not accept as a distinct class surface combatant vessels of or below 10,000 tons armed with guns of more than six inch and up to eight inch calibre. It is further clearly apparent that limitation of this type only would add enormously to the comparative offensive power of a nation possessing a large merchant tonnage on which preparation may be made

in times of peace for mounting six inch guns.

At the Three Power Conference at Geneva in 1927 the British Delegation proposed that cruisers be thus divided into two classes : those carrying eight inch guns and those carrying guns of six inches or less in calibre. They proposed further that eight inch gun cruisers be limited to a small number or to a small total tonnage limitation and that the smaller class of cruisers carrying six inch guns or less be permitted a much larger total tonnage, or, what amounts to the same thing, to a very large number of cruisers of this class. The limitation proposed by the British Delegation on this smaller class of cruisers was so high that the American Delegation considered it, in effect, no limitation at all. This same proposal is now presented in a new and even more objectionable form which still limits large cruisers which are suitable to American needs but frankly places no limitation whatever on cruisers carrying guns of six inches or

less in calibre. This proposal is obviously incompatible with the American position at the Three Power Conference. It is even more unacceptable than the proposal put forward by the British Delegation at that Conference not only because it puts the United States at a decided disadvantage but also because it discards altogether the principle of limitation as applied to important combatant type of vessels.

Much of what has been said above as to vessels in Class 3 of the Franco-British agreement applies with equal or greater force to Class 4. The American Government can not accept as a distinct class of submarines those of over 600 tons leaving unlimited all submarines of 600 tons or under. Six hundred ton submarines are formidable combatant vessels. They carry the same torpedoes as are carried by larger submarines and of equal destructive force within the radius of their operation. They can also be armed with guns of five inch calibre. The United States would gladly,

in conjunction with all the nations of the world, abolish the submarine altogether. If, however, submarines must be continued as instruments of naval warfare, it is the belief of the American Government that they should be limited to a reasonable tonnage or number.

If there is to be further limitation upon the construction of war vessels so that competition in this regard between nations may be stopped, it is the belief of the United States that it should include all classes of combatant vessels, submarines as well as surface vessels.

The Government of the United States has earnestly and consistently advocated real reduction and limitation of naval armament. It has given its best efforts towards finding acceptable methods of attaining this most desirable end. It would be happy to continue such efforts, but it can not consent to proposals which would leave the door wide open to unlimited building of certain types of ships of a highly efficient combat-

ant value and would impose restrictions only on types peculiarly suitable to American needs.

The American Government seeks no special advantage on the sea, but clearly can not permit itself to be placed in a position of manifest disadvantage. The American Government feels, furthermore, that the terms of the Franco-British draft agreement, in leaving unlimited so large a tonnage and so many types of vessels, would actually tend to defeat the primary objective of any disarmament conference for the reduction or the limitation of armament in that it would not eliminate competition in naval armament and would not effect economy. For all these reasons the Government of the United States feels that no useful purpose would be served by accepting as a basis of discussion the Franco-British proposal.

The American Government has no objection to any agreement between France and Great Britain which those countries think will be to their advantage and

in the interest of limitation of armament, but naturally can not consent that such an agreement should be applied to the United States.

In order to make quite clear that, in declining to adopt the Franco-British agreement as a basis for discussion of naval limitation, it seems appropriate briefly to review the attitude of the United States regarding the methods of limitation, in order to show that the American Government has consistently favored a drastic proportional limitation. The success of the Washington Conference is known to all. It strictly limited all combatant ships and aircraft carriers of over 10,000 tons. In order to bring about such limitation the American Government made great sacrifices in the curtailment of plans of building and in the actual destruction of ships already built. At the first session of the Preparatory Conference, the American Government submitted proposals which were consistently adhered to at subsequent meetings :

- 1) That the total tonnage allowed in each class of combatant vessel be prescribed.
- 2) That the maximum tonnage of a unit and the maximum calibre of gun allowed for each class be prescribed.
- 3) That so long as the total tonnage allowed to each class is not exceeded, the actual number of units may be left to the discretion of each power concerned.

Within this general plan the American proposal at the Geneva Conference was, for the United States and the British Empire, a total tonnage limitation in the cruiser class of from 250,000 to 300,000 tons and for Japan from 150,000 to 180,000. For the destroyer class, for the United States and the British Empire, from 200,000 to 250,000 and for Japan from 120,000 to 150,000 tons. For the submarine class, for the United States and the British Empire, 60,000 to 90,000 tons and for Japan 36,000 to 54,000 tons. It was further stated by

the American Delegation that, if any power represented felt justified in proposing still lower tonnage levels for auxiliary craft, the American Government would welcome such proposal.

The purpose of these proposals was that there might be no competition between the three powers in the building of naval armament, that their respective navies should be maintained at the lowest level compatible with national security and should not be of the size and character to warrant the suspicion of aggressive intent and finally that a wise economy dictates that further naval construction be kept to a minimum.

The Government of the United States remains willing to use its best efforts to obtain a basis of further naval limitation satisfactory to all the naval powers, including those not represented at the Three Power Conference in Geneva, and is willing to take into consideration in any conference the special needs of

France, Italy or any other naval power for the particular class of vessels deemed by them most suitable for their defense. This could be accomplished by permitting any of the powers to vary the percentage of tonnage in classes within the total tonnage; a certain percentage to be agreed upon. If there was an increase in one class of vessels it should be deducted from the tonnage to be used in other classes. A proposal along these lines made by France and discussed by the American and French representatives would be sympathetically considered by the United States. It expects on the part of others, however, similar consideration for its own needs. Unfortunately the Franco-British agreement appears to fulfill none of the conditions which, to the American Government, seem vital. It leaves unlimited a very large class of effective fighting ships and this very fact would inevitably lead to a recrudescence of naval competition disastrous to national economy.

(付 記)

伊国回答訳文

一、伊国政府ハ英国大使館カ軍縮會議準備委員会ニ上程スヘキ英仏海軍協定「テキスト」ヲ伊国政府ニ通告セル本年七月三十一日付第二八一号口上書ヲ引用スルノ光栄ヲ有ス其後同大使館ハ九月二十七日付第三五四号口上書ヲ以テ右協定ニ関シ英仏両国間ニ交換セラレタル公文書類ヲ伊国政府ニ伝達シ英仏両政府間ニハ右書類以外本件ニ関スル書類存在セサル旨ヲ付記セラレタリ右交換公文書中ニハ七月三十一日付口上書ニ記載セル協定条項以外ニ協定適用ニ対スル形式問題ヲ取扱ヒ居リ尚右形式問題ニ関スル提案採用ノ場合ニハ英国政府ハ「教育予備兵」ニ関シ仏国政府ニ満足ヲ与フヘキコトヲ表明セラレ居レリ

二、伊国ニ通告セラレタル前記協定条項ニ依レハ軍縮會議ハ左記ノ如ク軍艦ヲ四種類ニ区分シ之ニ制限ヲ設定スヘキモノナリ

- (a) 主力艦即チ一万噸以上ニシテ口径二〇三「ミリメートル」以上ノ備砲ヲ有スル艦

- (b) 一万噸以上ノ航空母艦
- (c) 一万噸及ソレ以下ニシテ口径一五二「ミリメートル」以上二〇三「ミリメートル」以下ノ備砲ヲ有スル艦

(d) 大洋航行ニ堪ユル潜水艦即チ六百噸以上ノモノ然ルニ「ワシントン」条約ハ既ニ(a)及(b)艦種ノ制限ヲ規定セルヲ以テ軍縮會議ハ右二種ニ関シテハ単ニ既定制限ヲ「ワシントン」条約調印国以外ノ諸国ニ拡大セシムヘキ方法ヲ考量スヘシ

其他ノ艦種即チ(c)及(d)ニ関シテハ軍縮會議ハ各国ニ対シ適用シ得ヘキ最大限ノ噸数ヲ定メ而シテ何国ト雖モ本協約有効期間中ハ各艦種ニ充テラレタル総噸数ヲ超ユルコトヲ得サルモノト為スヘシ此ノ最大限ノ制限内ニ於テ各国ハ前記各艦種ニ対シ各自ノ所要噸数ヲ定メ協約有効期間中ハ之ヲ超過セサルコトヲ約束スル旨ヲ軍縮會議ニ申出ツヘシト為セリ

三、英国政府ハ前記ノ如キ提案ニ対シ伊国ノ賛同ヲ求め来リタルカ右同様ノ要求ハ日米両政府ニモ亦為サレタリ伊国政府ハ本件諸問題ヲ研究ノ結果喜ンテ自己ノ所見ヲ

開陳スヘシ

先ツ伊国政府ハ海軍問題ノミヲ分離シテ討議スルコトニ賛同スル能ハス以下述フル所ハ陸海空三軍問題ノ最モ広ク且論理的考察ヲ前提トスルモノナリ

伊国政府ハ英仏提案中海軍ニ関スル提議及陸軍ノ教育予備兵及動員ノ場合ニ関スル問題ノ間ニ生スル關係中ニ此意味ニ於ケル一ノ指示ヲ發見セリト信ス

伊国政府ハ又二三ノ国ニミ制限ヲ加フル如キ軍縮問題ヲ考量スル能ハス軍備及其ノ制限ハ絶対的ナルヘカラス他国トノ相対的ナルヲ要ス於茲モ亦伊国政府ハ少クモ主義ニ於テ「ワシントン」条約ノ条項ヲ未調印諸国ニ拡大セントスル英仏案文中ニ右伊国ノ主張ノ適用ヲ發見セリト信ス

四、陸、海、空軍軍縮ニ関シテハ伊国政府ハ既ニ他ノ場合ニ於テ為セル声明ヲ繰返ヘサントス即チ伊国政府ハ率先シテ欧州大陸ノ他ノ国ヨリ劣勢トナサル限り如何ナル数字迄ニモ縮少ヲ為スノ用意アリ伊国政府ハ軍縮會議ノ實現スヘキ連盟規約第八条ノ主義即チ国防上ノ必要ニ副フ最少限度ノ軍縮ヲ齎ラサンカ為ニハ右声明以外何モノ

ノ如キ自国ノ自然的狀況ヨリ国家防禦ノ必要ヲ考慮スルノ已ム無キニ至レリ

伊国ハ世界各地トノ交通ハ僅カニ三線ヲ有シ物資ノ供給ヲ受ケンカ為ニハ必ス「スエズ」「ジブラルタル」及「ダルダネル」ノ三通路ヲ經由セサルヘカラス

伊国ハ長キ海岸線ヲ有シ其ノ海岸ニハ人口稠密ニシテ而カモ国家生活ノ中心ヲ為ス多数ノ都市存在スル外僅カ海岸ヲ離レテ二大島及「ドデカネーヅ」アリテ共ニ本国ト緊密ノ關係アル交通路ニ依リ連結セラレ居レリ伊国ハ地中海ニ進出シ又ハ進出シ得ヘキ国家ニシテ特ニ其ノ地理的位置ニ幸ヒセラレ交通ノ幹線ヲ脅カシ又多數ノ各種艦艇ヲ所有シ或ハ大規模ノ海軍計画ヲ遂行セントスル他国ニ対シ考量セサルヘカラス

五、右同様ノ考察ハ海軍建造計画ノ事前通告ニ関スル今回ノ英仏提議ニ対シテモ亦有効ナリ英仏提議ノ如キ方法ヲ採用スレハ技術ノ進歩及形勢ノ変化ニ依リ各艦種ノ能率ニ及ホスヘキ予見シ能ハサル事態ニ備ヘンカ為各國ハ必然的ニ最モ大ナル海軍計画ヲ実行スルニ至ルヘシ

六、英仏案文中(a)及(b)項ハ主力艦及航空母艦ニ就テ「ワシ

モ忠実ニシテ且完全ニ之カ適用ヲ示スコトヲ得スト思考ス

伊国政府ハ海軍問題ニ付該主義ノ適用ニ対シ最モ適當ナル方法ハ艦種別制限ヨリモ寧ろ総噸數制限主義ノ採用ナリト信ス

総噸數主義ニ依レハ各國ノ各自ノ所見ニ從ヒ総噸數ヲ活用シ得ヘク大ナル伸縮性ト形態ノ適合性トヲ有スル結果各國ハ最低限ノ制限ヲ承認スルコトヲ得ヘク而シテ軍縮ノ実ヲ挙クルト共ニ經費ノ軽減ヲ為スニ至ルヘシ

以上ハ総テノ国ニ適用セラルヘキ一般的見解ナリ次ニ所要目的ニ対シ一層大ナル重要性ヲ齎ラスヘキ左ノ見解ハ軍備ノ少ナキ国ニ直接關係アルモノナリ

艦種別主義ニ依レハ財力豊カナル国ハ財力乏シキ国ニ比シ各艦種共絶対優勢ヲ保持スルヲ得ヘシ然ルニ総噸數主義ニ依レハ各國ハ自己ノ国防上ノ必要ニ鑑ミ自己ニ適スルト認ムル艦種ヲ選ミ得ルカ為軍備ノ少ナキ国ハ右艦種ノ選択ト適合トヲ以テ他国ノ優勢ニ対シ何等カ補フコトヲ得ヘシ

伊国ノ特種情勢ニ鑑ミ伊国カ曾テ為セル声明ニ基キ左記

「ワシントン」条約ノ条項ヲ未調印国ニ拡大スヘキコトヲ勧告セントスルモノナリ

多數ノ相違セル見解ヲ融和スルノ困難ナルニ顧ミ伊国政府ハ海軍軍縮ニ最モ有數ナル一方法トシテ「ワシントン」条約調印五大国ハ同条約ノ認ムル千九百三十一年乃至千九百三十六年ノ間ニ建造シ得ル主力艦ノ建造ヲ千九百三十六年以後ニ延期スルコトヲ約束スヘキヲ可ナリト信ス伊国政府ハ他ノ調印国ニ於テ一様ニ約束スル場合ニハ前記ノ約束ヲナスヘキ用意アリ

此種調印ノ採用ハ五大国ハ「ワシントン」条約ノ予見スル千九百三十一年度ニ於ケル關係ヲ繼續スルモノニシテ五大海軍國ノ平和的精神ノ實際的証左ヲ世界ニ示スコトナルヘシ右ハ著シキ節約ヲ保障シ且英仏案ノ大ナル不安ノ一トスル所即チ大ナル攻撃力ヲ有スル軍艦ヲ特ニ制限セントスル趣旨ニモ満足ヲ与フヘキモノナリ

七、伊国政府ハ英國政府ニ対スル回答トシテ最モ友誼アリ且最モ誠実ナル協力的精神ヲ以テ叙上ノ見解ヲ提示スルノ光榮ヲ有ス

伊国政府ハ本件問題ノ主要ナルコト及何等カ問題ノ解決

方法ヲ講スルノ必要ナルコトヲ充分ニ考慮シタリ伊国政府ハ此ノ希望ニ副フヘキ真ノ解決ハ等シク各国ノ正当ナル要求ヲ調節シ各国自ラ進ンテ忠実ニ賛同スルカ如キモノタルヘシト思考ス

従来英仏同様欧州ノ整頓及再建設ニ関スル重要ナル国際諸条約ニ参加セル伊国政府ハ軍縮問題ニ対シテモ亦右欧州ノ強固ト再建設トヲ増大シ裨益シ得ル一ノ機関タルヘキ総テノ協力ト貢献トヲ為スヘキ決意アルコトヲ茲ニ重ねテ確言ス

19 昭和3年9月28日 小村情報部長口述速記

英仏海軍協定の内報に関する仏国大使の談話について

英仏間ノ海軍協定問題ニ関シ仏国大使来訪ノ件

九月二十八日仏国大使来省小村情報部長ニ面会シテ本國政府ノ電訓ニ依ル趣ヲ以テ左ノ通り申述ベタ

近頃世間デ問題ニナツテ居ル英仏間ノ所謂海軍協定ノ内容ニ付テハ世上種々ノ疑惑モアルノデ愈々米國政府ニ内容全部ヲ内報スルコトニ英仏間ニ相談力決ツタ掟テ日本政府ヘ

21 昭和3年10月19日 田中外務大臣より
在英國佐分利臨時代理大使宛(電報)

連盟権限内の海軍軍縮問題審議への疑義に鑑み英仏協定への英國の意向探査方について

本省 10月19日後3時発

海軍軍備制度ニ関スル件

第一五五号(極秘)

佐藤局長来電第一六二号ニ関シ

本邦トシテハ五国内協議ニハ同意ナルモ海軍問題ヲ必シモ連盟ノ権内ニ入レサルヘカラストハ思考セサルニ付キ貴官ハ単ニ仏宛往電第一九一号ノ主旨ヲ含ミ仏国大使ヨリ英國政府ヘ申出ノ場合之ニ対スル同國政府ノ意向ヲ探査ノ上回電アリ度シ

仏米伊ニ転電シ仏ヲシテ連盟ニ転達セシメラレ度シ

22 昭和3年11月(16)日 在米出淵大使より
田中外務大臣宛(電報)

休戦記念日における大統領の演説及び巡洋艦建造に関する海軍長官の声明について

ワシントン

モ速カニ右内容ヲ内報スルコトニナツタ尤モ其ノ text ハ未タ自分ノ手許ニハ来テ居ナイガ或ハ其ノ中来ルカモ知レナイ又都合ニ依テハ倫敦、巴里、或ハ「ジュネーヴ」デ日本政府ノ代表者ニ御渡スルコトニナツテ居ルカモ知レナイ以上ノ趣ヲ田中外務大臣ニ内密トシテ御伝ヘテ願度イ

小村情報部長口述速記

20 昭和3年10月6日 田中外務大臣より
在仏國安達大使宛(電報)

英仏米三国間に軍縮商議行わるる場合の措置方について

本省 10月6日後4時発

第一九一号

佐藤局長發本大臣宛電報第一四一号ニ関シ

英仏米三国間ニ商議行ハルルガ如キ場合ニハ我方ニ於テモ当初ヨリ之ニ参加ヲ要スルコト勿論ナルニ付テハ貴官ハ右御含ミヲ以テ責任國政府ト絶エス接触ヲ保チ局面ノ進展ニ応ジ適宜措置セラレタシ

本電本大臣ノ訓令トシテ連盟事務局ニ轉達、英及米ニ転電シ参考トシテ伊ニ転電アリ度シ

本省 11月16日前着

第三六五号

十一日休戦記念日ノ演説ニ於テ大統領ハ先ツ大戰ニ於ケル米國ノ貢獻及犠牲ヲ述ヘタル後軍縮、不戰条約、戦債等ニ対スル米國ノ立場及政策ヲ詳述シ平和確保ノ為米國ハ preparation, limitation, renunciation ノ實際的政策ヲ取り居レリトシ更ニ欧州諸國カ米國ヲ一層諒解セムコトヲ求メ相互ノ親善ヲ維持シ得ハ戦債ノ解決並軍縮ヲ遂行シ欧州ノ進歩ヲ援助スルコト確實ナルヘキ旨述ヘタルカ右ノ内軍縮問題ニ付テハ国防ニ適當ナル用意ヲ為シ置クコトハ敵対行為又ハ國家權利ノ侵害ノ機ヲ少クスルモノニテ右ハ米國ノ主要ナル態度ナル処米國海軍ニ付テハ尚多數ノ軍艦ヲ要ストシ華府會議以後ト軍縮ノ經過ヲ略述シ寿府會議當時及英仏協定ニ現ハレタル英國ノ主張ハ軍縮ノ目的ニ叶ハサルモノニテ米國ノ容ルル能ハサル処ナリトシタルカ日本ニ付テハ何等言及シ居ラス

右演説ニ対シ十二日及十三日ノ当國各新聞ハ殆ト拳ツテ賛意ヲ表シ特ニ其ノ海軍問題ニ関スル部分ニ注意ヲ払ヒ主トシテ之ニ付論評ヲ加ヘ居レルカ大体右大統領ノ直截ナル言

要ナルモノハ、隨時電報アリ度シ尚本件ニ関シテハ海軍省ヨリモ貴館付武官ニ対シ閣下ト協力スル様電訓セル筈
(仏宛ノ分ヘハ左ノ通り追加ノコト)
本大臣ノ訓令トシテ英、伊、連盟事務局ニ転電アリ度シ

24 昭和4年2月18日 在英国松平大使より
田中外交大臣宛(電報)
海軍軍縮会議開催問題及び中国問題に関する
チェンバレン外相との会談について

第七五号

二月十八日日本使新任挨拶ノ為外相ニ面会ノ節目下一般ノ注意ヲ喚起シ居ル海軍會議開催方ニ関スル在米英國大使ノ談話ニ付テハ帝國政府ニ於テモ深く興味ヲ有スルコトト信スル旨ヲ述ヘ夫レトナク真相ヲ尋ネタル処外相ハ同大使ハ恐ラク極メテ漠然タル字句ヲ以テ私見ヲ述ヘタルモノト思ハルルカ夫レカ為英國政府ニ於テ一九三一年以前ニ會議開催ヲ申出スコトヲ考量シツツアルカ如キ感想ヲ一般ニ与ヘタルカ如キモ英國政府ハ斯ノ如キコトヲ考量シ居ラス尤モ来

明ハ米國輿論ノ大部分ノ支持ヲ受ケ一面英國政府ニ教ユル処多カルヘシトシ米國ハ國防ノ用意アルヲ要スル処歐洲諸國中米國ノ「バリチイ」ニ反対ナル政策ヲ考慮スルモノアル間ハ米國ハ尚多数ノ軍艦ヲ建造スルノ要アリ從テ前議會ヲ通過セサリシ拡張案ハ來議會ニ於テハ國防上必要ト認メラルヘシトノ趣旨ニ一致シ居レルカ「バルチモア」、イブニング、サン」ハ休戰紀念日ニ大統領カ海軍競争再開ヲ意味スルカ如キ言ヲ為スハ矛盾ノ嫌アルモ右ハ米國人ノ現在ノ氣持ヲ現ハセリトセルニ對シ紐育「タイムズ」ハ大統領ノ演說中或ル場合ニハ徹底的平和論者ノ如クニテ他ノ場合ニ於テハ戰爭ハ軍事的用意ニ依リ之ヲ防止シ得ヘシトシ其ノ思想ニハ不明確且不徹底ナルモノアリトシ尚「バルチモア、サン」ハ大統領カ一方ニ於テ理性及良心ニ訴フルコトヲ説キ乍ラ他方ニ於テ戰爭ニ對スル準備ヲ主張スルハ徹底ヲ欠クト論シ居レリ

尚十二日海軍長官ハ米國海軍政策ニ関スル長文ノ「ステートメント」ヲ公表セルカ補助艦艇ニ付華府條約規定ノ比率ニ一致セル噸数迄建造及維持スルコト特ニ巡洋艦ニ関シテハ旧艦ハ一切一万噸八吋ノ大型艦ヲ以テシ且今後ハ右大型

艦ノミヲ建造スヘク小型艦ヲ建造セスト定メ居レリ
右演說及「ステートメント」、テキスト」郵送ス
英ニ転電シ英ヨリ仏、伊、連盟事務局ニ郵送セシム

23 昭和4年2月15日

田中外交大臣より
在米國出淵 在仏國安達各大使宛電報

海軍關係諸問題に関する情報入手方訓令について

本省 2月15日後5時発

合第八九号

海軍軍備制限ニ関スル英仏妥協案ハ立消ノ姿トナレルモ米國海軍拡張案ノ通過ニ伴ヒ且ツハ連盟軍縮準備委員會ノ開會近ツクニ随ヒ本問題ニ對スル各國政府ノ態度モ日ヲ追フテ判明スルニ至ルコトト思考セラルル処本問題カ財政上將タ又國防上帝國政府ノ最も重要視スル所タルハ申ス迄モナキ義ナルニ依リ之レニ對スル責任國政府ノ態度ニ付テハ今後トモ精々御留意ノ上主力艦問題補助艦問題其ノ他第二次華府會議並ニ戰時海上法規條約締結ニ関スル帝國政府ノ態度決定上參考トナルヘキ事項ニ関スル政府当局及外交團ノ態度意向乃至ハ民間有力者ノ意見等(断片的情報ニテモ重

ル四月寿府予備會議ニ於テ一九三一年ヲ待タスシテ會議開催方然ルヘキヤ否ヤニ付問題起ルコトアルヤモ知レサレトモ近キ將來ニ於テ英國政府ヨリ何等具體的ニ軍縮會議開催ヲ提議スルカ如キコトナカルヘシト言ヘルニ付本使ハ成功ノ確タル見込ナクシテ會議ヲ開催シ經ラズシテ解散スル時ハ却テ面白カラサル結果ヲ齎ラス俱アルヘキ旨ヲ述ヘタルニ外相モ亦同様ノコトヲ繰返シタリ尚支那問題ニ関シ外相ハ北京ニ於テ日英兩國公使間ニ協調ヲ保チ居ル事ト信スル旨並ニ「ランブソン」カ出來得ル丈ケ日支間ノ意思疏通ヲ計リ居ルト思考スル旨ヲ述ヘシニ付本使ハ右ハ帝國政府ニ於テモ多トシ居ル旨ヲ述ヘタルカ外相ハ昨今支那全体ノ狀況ハ概シテ改善セラレツツアル様思ハル尤モ最近左翼一派ト南京政府派トノ間ニ確執起リツツアルカ如キモ是等ハ彼等同志ノ判断ト処置ニ委ス方可ナルヘシ又特殊條約ニ基ク外國人ノ地位ハ漸次之ヲ常態ニ復帰スル外ナカルヘキモ之ニ對シテハ支那カ全責任ヲ以テ外人保護等ニ付文明國ノ為スヘキ事ヲ為ササルヘカラス要スルニ忍耐ヲ以テ彼等ノ改善ヲ待ツノ外無シト思考スル旨ヲ述ヘタリ尚本使ヨリ閣下發在米大使宛電報第五六号ノ大略殊ニ帝國政府ノ寛大ナル

態度ヲ内話シ支那人ハ一ヲ得レハ更ニニヲ要求スル常習アルモ外国民ニ対スル体面上強硬ノ態度ヲ執リ居ルモ早晚解決スルコト思フ旨ヲ述ヘタルニ外相ハ自分ノ受ケタル最近ノ情報モ亦有望ニ思ハル旨ヲ述ヘタリ

米、仏、独、伊へ転電セリ

白、露、蘭、西、瑞典へ暗送セリ

25 昭和4年2月22日 在英國松平大使より
田中外務大臣宛

ハワード駐米大使の声明に関連した英国外務

省の軍縮関係コミュニケ送付について

付属書

二月十六日発表の右英国外務省のコミュニケ

付記

二月十五日付ハワード駐米大使の声明文

普通第一〇九号

(三月十五日接受)

昭和四年二月二十二日

在 英

特命全權大使 松平 恒雄(印)

外務大臣男爵 田中 義一殿

海軍軍縮問題ニ関スル英国外務省「コンミニ

ュケ」送付ノ件

It is unlikely, therefore, that his Majesty's Government will be in a position to make any further communication for some time.

(付記)

SIR ESME HOWARD'S STATEMENT

There would seem to be every reason to believe that now that the fifteen-cruiser bill has become law, a further effort before long will be made to reach an agreement between the principal naval powers of the world for the limitation of naval armaments. As long as that bill was under discussion, any proposal to renew conversations on this vital subject would have been interpreted in the United States of America as an attempt to interfere with the passage of the bill.

By its passage, the ground is cleared and any discussions that take place will certainly proceed on the assumption that these ships will be built. The English elections, which will take place this summer, may,

在米英國大使「ハウアード」カ海軍軍縮問題ニ関シ為セル「ステートメント」カ誤解ヲ惹起セル虞アリトテ右誤解ヲ防ク目的ヲ以テ二月十六日英国外務省ヨリ「コンミニュケ」發表シタル次第ハ往電第七六号ヲ以テ報告ニ及ヒ置キタル処何等御参考途同「コンミニュケ」原文爰ニ送付ス御查收相成度シ

本信写送付先、在米、独、伊各大使及在巴里連盟事務局
長

(付属書)

There has been no change in the situation since Sir Austen Chamberlain informed the House of Commons, on February 6, that His Majesty's Government were engaged in the careful examination of "all questions concerning our relations with America and the naval conditions of the two countries."

This examination is being diligently prosecuted. As soon as it is concluded, the first step will be to communicate its result to the Governments of the Dominions and to receive and consider their views.

however, postpone any discussion of this kind for some months longer.

The disarmament clauses of the Versailles Treaty make it practically imperative for all signatories of that Treaty that further efforts be made towards the restriction of armaments. The United States has hitherto shown itself favorable to the idea of continuing negotiations for an agreement in this sense.

It would therefore seem that everything points toward an early resumption of negotiations, and with a far better understanding of the needs of the respective parties than existed at Geneva in 1927 there should be a very good prospect of their being brought to a satisfactory conclusion.

26 昭和4年3月13日

在仏國安達大使より
田中外務大臣宛(電報)

海軍軍縮會議開催の風説に對シ英公使館より
ニ付復シテ云フ

ハリ 3月13日後發

本省 3月14日前着

第七五号(至急)

貴電第四四号ニ関シ

大使寿府滞在中英国新聞ニ同様ノ記事アリタルニ付「チェンパレン」ニ対シ其ノ真偽ヲ尋ネタルニ「チエン」ハ右ハ全然虚構ノ風説ニ過キスト言明シタルカ次テ十三日当地諸新聞ニモ此ノ種ノ報道掲載セラレタルヲ以テ佐藤公使ヨリ為念仏国連盟事務局長ニ真偽ヲ尋ネタルニ同局長モ寿府ニテ英仏外相ノ間ニ何等右様ノ談合行ハレタルコトナク自分モ新聞報ヲ見テ驚キタル次第ナリト答ヘタル趣ニテ目下ノ状態ニテハ到底緊急ニ海軍制限会議開催ノ運ニハ至ラサルヘント観測セラル

英へ転電セリ

27 昭和4年3月13日

田中外交大臣より
在仏国安達大使宛(電報)

五国間海軍軍縮会議開催に関する情報内査方
について

本省 3月13日後0時15分発

第四四号

ノコトナリト云ヘリ尚過日米国大使「ハウトン」(近日帰国引退ノ筈)ト軍縮問題ニ付テ懇談ノ際同氏ハ私見トシテ先ツ会議ニ先立チ外交機関ヲ通シテ意思ノ疏通ヲ計ルコト必要ナリト思考スル旨述ヘ居リタリ御参考迄
仏へ転電シ米ニ暗送セリ

29 昭和4年4月(7)日

在米出淵大使より
田中外交大臣宛(電報)

来るべき軍縮準備委員会における米国の方針
に関する大統領の新聞記者への談話について

ワシントン
本省 4月7日前着

第一〇八号

六日ノ当国諸新聞ノ報スル処ニ依レハ大統領ハ新聞記者トノ会談ニ於テ来ル連盟軍縮委員会ニ於テハ将来ノ会議ニ於ケル協定ノ基礎タルヘキ「フォームラ」ヲ作製シ得ルニ至ラムコトヲ希望シ居ル旨ヲ語り且米国側ハ大体従来ノ方針ヲ踏襲スルモ海軍勢力決定ニ付キテハ単ニ噸数ノミナラス速力艦齡ヲモ考慮スヘキモノト認メ居ル旨ヲ述ヘタル趣ナリ

至急

十二日巴里發電通ニ依レハ過般ノ連盟理事会ニ出席セル英仏両国外相ノ間ニ話合纏リ来ル六月中旬主要五国海軍制限會議ヲ開催スルコトニ決定セリトノコトナルカ右ハ果シテ事実ナリヤ其ノ間ノ事情至急御内査ノ上真相回電アリ度シ本電本大臣ノ訓令トシテ英ニ転電アレ

28 昭和4年3月15日

在英国松平大使より
田中外交大臣宛(電報)

海軍軍縮會議の風説を当局者否定について

ロンドン 3月15日後発
本省 3月16日前着

第一〇八号

仏宛貴電第四四号ニ関シ

往電第七六号交渉ノ言明モアリ当国ニテハ来ル五月ノ総選舉ヲ控ヘ居ル今日ヨリ選挙後ノコトヲ定ムル如キコトモアリトハ思ハレス又前回會議ノ失敗ニモ鑑ミ予メ意思ノ疏通ヲ計ルコトナクシテ遽ニ軍縮會議開催ヲナス様ノコトナカルヘント思考シ居タル処十四日「ブリッジマン」ニ面会ノ折為念問ヒ質シタルニ「ブ」ハ右様ノコトハ全然事実無根

英ニ転電シ仏、伊、連盟事務局ニ郵送セシム

30 昭和4年4月22日

在ジュネーヴ佐藤連盟事務局長より
田中外交大臣宛(電報)

軍縮準備委員会におけるギブソン米国代表の
声明要旨について

ジュネーヴ 4月22日後発
本省 4月23日後着

第四九号

準備委員会二十二日午前ノ會議ニ於テ「ギブソン」ノ為シタル声明要旨左ノ通

一、軍縮条約案第一読会ニ於テハ各国代表自説ヲ主張スルコト当然ナルヘキモ第二読会ニ入ラハ各国ハ夫々自国ノ為シ得ヘキ最大ノ譲歩ヲ示スヘク然ラスハ単一ノ条約案ニ達スルコト不可能ナルヘシ

二、陸軍問題ハ寧ロ之ヲ他ノ主要関係国ノ論議ニ譲リ米国代表トシテハ實際上協定ノ成立ヲ容易ナラシムヘキ一切ノ譲歩ヲ為スニ咨ナラス

三、海軍問題ニ関シテハ

(4)米国政府ハ海軍軍縮ノ際簡単、公平且實際的方法ハ艦

種別制限ニアリトノ從來ノ見解ヲ保持スルモ他国ニ於テ之カ受諾ヲ難シトスルモノアルニ鑑ミ各種ノ妥協案ヲ発見スルニ努メタリ就中仏国代表カ第一読会ノ際提出セル妥協案ニ其ノ後非公式ノ会談ニ於テ提議セラレタル如ク主力艦及大航空母艦以外各艦種別間ニ一定百分比ノ融通ヲ認ムルノ修正ヲ加ヘタル案ハ之ヲ討議ノ基礎トシテ受諾シ得ルノ用意アリ

(ロ)米国政府ハ自国案又ハ仏国案其ノ他ノ案ノ一般の受諾ヲ容易ナラシムヘキ補足的方法就中海軍力ノ比較測定ニ当リ排水量以外ノ要素モ参酌スルノ方法ヲ考慮セムトス(此ノ点ニ関スル全文別電第五〇号ノ通)

(ハ)以上ハ軍縮ノ方法ニ関スル第二義の問題ニシテ要ハ軍縮ノ實際の遂行ニアリ而シテ戦争放棄条約ノ締結ニ依リ軍縮事業ハ曾テ見サル絶好ノ機会ニ遭遇セル今日吾人ハ軍備制限ト言フカ如キ消極的態度ヲ捨テ積極的ニ軍備ノ大減縮ニ向ツテ邁進セサルヘカラス米国政府ハ既ニ三国会議ノ際ニモ各国ノ保有スヘキ一定ノ噸数ヲ提議スルト共ニ会議参加国ニ関シ現存条約ノ相對的現狀 (relative status of existing treaties) ヲ維持ス

往電第四九号ニ関シ

「ギブソン」声明ニ引続キ我方及英、仏、伊、露等各代表ノ為シタル声明要旨左ノ通

(一)英国代表、米国代表ノ声明ノ内容ニ対シ今直ニ自分ノ態度ヲ「コムミット」シ得サルモ其ノ一般的主義ニハ賛成ナリ就中不戦条約カ軍縮事業ニ対シ新光明ヲ与ヘタル事海軍軍備ノ制限ニ満足セスシテ軍備ノ縮少ニ邁進スヘキ事及海軍軍縮ハ一切ノ艦艇ニ及フヘキモノナル事等ハ全然同感ニシテ現ニ英国政府ハ約一年前主力艦ノ艦型縮少及艦齡ノ延長並ニ潜水艦ノ廃止ニ関スル提案ヲ為セリ米国代表ノ提案セル海軍力測定方法ニ関シテハ英国政府モ既ニ同様ノ研究ヲ行ヒ居タル次第ニシテ何レ専門的審査ノ完了ヲ待ツテ意見ヲ發表スヘシ

(二)本官、米国代表ノ重要ナル声明ニ対シ今此処ニ細目ニ亘リ定見ヲ述ヘ難キモ之カ内容ハ早速之ヲ政府ニ取次キ其ノ考慮ヲ求ムヘシ本委員会中右ニ関シ更ニ米政府ノ態度ヲ明ニスヘキ旨ノ訓令ニ接セハ改メテ意見ヲ開陳スルコトアルヘシ米政府ノ對軍縮態度ハ屢次声明ノ通ニシテ苟モ合理的且公正ナル案ナラハ如何ナル種類ノ提案ト

ヘキ更ニ低キ噸数ヲモ受諾スルノ用意アル旨ヲ宣言シタルカ今尚右態度ニ変更ナシ

(二)軍縮ハ例外ナク一切ノ艦艇ニ及ホササルヘカラス此ノ点ハ英仏妥協案ニ関スル米政府ノ對英回答中ニモ明カニシ置キタル処ナリ

(ハ)右米政府ノ對軍縮態度ハ各国海軍力ノ需要ヲ以テ相對的ナリトスルノ信念ニ基クモノニシテ今ヤ華府條約締約國ヲ脅スヘキ海軍力ノ単位存スルモノナク又締約國相互間ニ於テモ巨大ナル海軍力ヲ維持スヘキ何等ノ必要ナキニ當リ此ノ友好的關係ヲ基礎トスル常識的軍縮協定ノ成立セサル理由毫モナシ

米ニ転電シ英仏独伊へ郵送セリ

31 昭和4年4月23日

在ジュネーヴ佐藤連盟事務局長より
田中外務大臣宛(電報)

ギブソン声明に引続き日英仏伊及びソ連各代表の行なった声明要旨について

第五二号

ジュネーヴ 4月23日後発
本省 4月24日着

雖モ之ヲ考慮スルノ用意アリ海軍力測定ノ標準ハ簡單ナルヲ可トスルニ付米国代表ノ提案モ余リ複雑ニ亘ラサルニ於テハ大ヒニ考慮ニ値スヘシ尚日本政府ハ艦種ノ分類殊ニ水上補助艦及航空母艦ノ類別方法修正ニ関シ攻究中ナルヲ以テ何レ右ニ関スル提案ヲ為スノ機会アルヘシ

(三)仏国代表、海軍制限案ニハ窮屈ナルモノト融通性ヲ有スルモノトノ二種アル処仏国政府ハ常ニ後者ヲ主張シ来レリ第一読会ニ於ケル仏国代表案然リ英仏代表案亦然リトス米政府カ仏国代表案ノ主義ニ同意セラレハ大ニ満足トスル処ナリ

四伊国代表、米国代表ノ声明ハ専門家ノ研究ヲ要スヘキモ之カ慎重審議ヲナスニ咨ナラス

(四)「ソビエツト」代表、米国代表ノ声明ニハ「ソビエツト」提案ト主義上共通ナル点多シ制限ヲ不可トシ縮少ヲ高調スル点及軍縮ヲ比率ニ依リテ行ハムトスル点等皆其ノ趣旨ニ於テ同一ナリ但シ如何ナル主張モ具体的提案ヲ伴ハサレハ効果ナシ

米へ転電シ英、仏、独、伊へ郵送セリ

32 昭和4年4月23日 在ジュネーヴ佐藤連盟事務局長より
田中外交大臣宛(電報)

ギブソン米国代表の声明への対処方に関し請
訓について

ジュネーヴ 4月23日後発
本 省 4月24日後着

第五三三号(極秘)

往電第四九号、第五二号及第五一号ニ関シ

一、「ギブソン」ノ声明カ「フーバー」ト熟議ノ結果タル
ヘキハ疑ノ余地ナク即チ米国新政府ノ軍縮ニ関スル新政
策ノ表明ト見ルヘク而シテ右政策ノ要カ陸軍ニ関シテ
ハ從來ノ主張ヲ固執セスシテ妥協的態度ニ出テ単ニ制限
ニ止マラスシテ重要ナル縮小ヲナスト同時ニ海軍国間ニ
一定ノ比率ヲ保持セムトスルニアルコト注意ヲ要スルノ
ミナラス海軍問題ニ関シテモ総テ軍縮準備委員会ヲ通シ
テ事ヲ為サムトスル意向亦見逃スヘカラサルカ如シ
二、右ニ対スル英国側ノ態度ハ今後数日ヲ経サレハ判明シ
難カルヘキモ「カッペンダン」卿「ドラモンド」等ニ

ハナラサルヘシ

五、就テハ上記事情篤ト御考察ノ上米国声明ニ対スル政府
ノ見解発表ノ適否御決定相成何分ノ儀御電示アリタク米
案ノ所謂海軍力比較法ニ関スル御所見モ同時ニ御回示ヲ
請フ

六、比率問題ハ勿論軍縮本会議ノ権限ニ属スル処ナルモ米
カ華府会議ノ比率ヲ其ノ儘主力艦航空母艦以外ノ艦艇ニ
適用セムトスル腹ナルコト殆ト明白トナリタル今日主義
上ノ問題トシテ是ニ対シ相当ノ反駁又ハ不同意ヲ今ヨリ
勾ハシ置クコト或ハ必要カト存セラル此ノ儀併セテ御訓
令ヲ請フ

七、海軍問題ニ関スル小委員会新設ノ提議アラハ主義上之
ニ賛成シ差支ナシト信スルモ御所見如何本委員会ニハ独
露等ノ参加ハ絶対ニ拒否シ彼等ノ増長ヲ拒否スル必要ア
リト信スルモ帝国政府ニ於テハ別段ノ見解ヲ持セラルヘ
キヤ

八、三ニ記載ノ艦種別区分方法ノ変更ニ関シ本委員会ノ会
期中発表ノ必要アラハ他国ヲ首肯セシムヘキ充分ノ理由
ヲ付シ今一応御訓示ヲ請フ

於テ如何ニ米国声明ヲ重要シ居ルヤハ往電第五一号ニ依
リ略御想像相叶フヘキ通リナリ

三、依テ此ノ際我方ノ態度モ決定ノ必要アルヘク又二十二
日会議ノ空氣ハ三大海軍国タル本邦側ニ於テモ米国提案
ニ対シ慎重ノ考慮ヲ加ヘタル後態度方針ヲ闡明スルコト
アルヘキ旨直ニ声明スルノ必要アリト認メ簡單ニ往電第
五二号ノ声明ヲナシ且巴里宛電第四七号御来示ノ艦種
別区分方法ノ変更モ今ヨリ多少勾ハセ置ク方有利ト信シ
是ニ言及セル次第亦同電記載ノ通ナリ

四、右ノ如キ一般的情勢ヨリ之ヲ判断スルニ此ノ際委員会
ニテ帝国政府ノ確然タル見解ヲ発表スルハ大国ノ態度ト
シテ望マシキノミナラス他日ノ地歩ヲ確保シ得ル所以ナ
リト信セラル巴里宛電第四七号前段ニ依レハ本邦側ニ
於テ海軍軍縮ヲ焦慮シ居ル如キ感想ヲ与フルハ差控フヘ
シトノ御訓令ニテ当方ニテモ元ヨリ其ノ意ヲ体シ行動シ
居ルモ元来帝国ノ財政状態若ハ過般来帝国議會ニ於ケル
海軍問題ニ関スル討議ノ経過等ヲ熱心ニ研究シ居ル列強
ニ対シテハ態トラシク平靜ヲ装ハムトスルモ其ノ効ナカ
ルヘキト同時ニ前述ノ態度闡明ハ何等本邦内幕ノ暴露ト

九、米国力準備委員会ヲ通シテ海軍軍縮ヲ進捗セシメムト
スル底意カ果シテ連盟ノ如キ国際機関ニ於テ公正ヲ標榜
シテ既定比率ヲ押付ケ米國ノミカ悪者トナル不便ヲ避ケ
ントスルニアリヤ將又第一次華府會議ノ成功独占ヲ繰返
サントスル名譽心ヲ避ケ純粹ナル国際問題トシテ連盟ニ
持出サントスルモノナリヤ固ヨリ付度ヲ難シトスル処ニ
シテ或ハ又連盟ノ下ニ海軍問題ヲ議スレハ仏伊モ当然參
加シ三國會議當時ノ欠陥ヲ除去シ得ヘシトスル事情モ一
理由タリ得ヘシト思考セラルル処帝國政府ニ執リテハ寧
ロ連盟ノ範圍ニテ海軍問題ヲ論スル方米國ヨリ強テ比率
ヲ押付ケラルルカ如キ形ヲ避クル上ニ便アルヘク此ノ点
ニ関スル米提案必スシモ拒否ノ要ナカルヘシ
英、米、仏ニ転電、独、伊ヘ暗送セリ

33 昭和4年4月23日 在米國出淵大使より
田中外交大臣宛

軍縮準備委員会におけるギブソン米国代表の

声明全文送付について

普通公第二七四号

昭和四年四月二十三日

(五月十八日接受)

在米

特命全權大使 出淵 勝次(印)

外務大臣男爵 田中 義一殿

連盟軍縮準備委員会ニ於ケル米国代表「ギン

ン」ノ声明送付ノ件

四月二十二日連盟軍縮準備委員会ニ於ケル米国代表「ギン
ン」氏ノ声明全文当地ニ於テ發表セラレタレニ付、右ノ語
為念別添送アリ送付ス

TEXT OF SPEECH BY THE HONORABLE

HUGH S. GIBSON, AMERICAN REPRESENTATIVE, AT THE MEETING OF THE PREPARATORY COMMISSION FOR THE DISARMAMENT CONFERENCE, GENEVA, SWITZERLAND, APRIL 22, 1929.

Mr. Chairman :

I have sought your permission to make a general statement of the views of my Government in regard to the question of disarmament and have felt warranted in doing so at this stage of the proceedings

because while we have not entered upon a second reading of the draft convention, we are bringing up for reconsideration various questions which have been previously discussed. It is felt therefore that in view of certain changed conditions it may facilitate the approach to these questions if I am permitted to take this occasion for stating my Government's views as to the means best calculated to promote an early agreement.

During the first reading of the draft convention, it was the duty of each one of us to put forward the views of his Government on the various problems before the Commission and endeavor to persuade his colleagues that those views should be adopted. It was only in this way that we were able to throw full light upon the complicated questions, the solution of which we seek. When we come to the second reading, however, a renewal of the old discussions is no longer in order. Our first duty is for each one of us

to examine all phases of the problem before us with a view to discovering what measures of concession can be offered by each Delegation. Agreement upon a single text can be achieved only by a maximum of such concession.

For the purposes of my presentation the disarmament problem may be divided into two parts, land and naval armaments. As regards land armaments, the American Delegation will be able when we reach this question in our discussion to defer to the countries primarily interested in land armaments with such measure of concession as I trust will materially facilitate agreement among them.

My country's defence is primarily a naval problem. The American Government has found no reason for modifying its view that the simplest, fairest and most practical method is that of limitation by tonnage by categories, a method which has been given practical and satisfactory application in the Washington Treaty.

While it is realized that this does not constitute an exact and scientific gauge of strategic strength, we have nevertheless found that it constitutes a method which has the advantage of simplicity and of affording to each Power the freedom to utilize its tonnage within the limitation of each category according to its special needs.

The American Delegation has urged this view throughout the first reading, but, in view of the inacceptability to some other delegations of our unmodified thesis, my Government has sought in the various methods presented some solution which might offer the possibility of compromise and general acceptance. During the Third Session of the Preparatory Commission, the French Delegation brought forward a method which was an attempt to combine its original total tonnage proposals with the method of tonnage by categories. Under this method, a total tonnage was assigned to each nation and this total divided among

categories of ships by specified tonnages. If I am not mistaken, certain modifications were suggested in informal discussions, so as to provide that the tonnage allocated to any given category might be increased by a certain percentage to be agreed upon, such increase to be transferred from any other category or categories not already fixed by existing treaty.

In the hope of facilitating general agreement as to naval armaments, my Government is disposed to accept the French proposal as a basis of discussion. It is, of course, the understanding of my Government that this involves an agreement upon the method alone and not upon any quantitative tonnages or the actual percentages to be transferred from one category to another. All quantitative proposals of any kind should properly be reserved for discussion by a final conference.

My Government is disposed to give full and friendly consideration to any supplementary methods of limitation which may be calculated to make our proposals,

the French thesis, or any other acceptable to other Powers and if such a course appears desirable, my Government will be prepared to give consideration to a method of estimating equivalent naval values which takes account of other factors than displacement tonnage alone. In order to arrive at a basis of comparison in the case of categories in which there are marked variations as to unit characteristics, it might be desirable in arriving at a formula for estimating equivalent tonnage to consider certain factors which produce these variations, such as age, unit displacement, and caliber of guns. My Government has given careful consideration to various methods of comparison and the American Delegation will be in a position to discuss the subject whenever it comes before the Commission.

In alluding briefly to these possible methods, I desire to lay special emphasis on the fact that for us the essential thing is the achievement of substantial re-

sults. Methods are of secondary importance.

I feel that we are able to deal to best advantage with the specific questions on our agenda only if we bear clearly in mind the recent important changes in world conditions.

Since our last meeting, the nations of the world have bound themselves by solemn undertaking to renounce war as an instrument of national policy. We believe (and we hope that our belief is shared by the other nations) that this agreement affirming humanity's will to peace will advance the cause of disarmament by removing doubts and fears which in the past have constituted our principal obstacle. It has recently been my privilege to discuss the general problem of disarmament at considerable length with President Hoover, who has always been an ardent advocate of peace and good understanding. I am in a position to realise, perhaps as well as anyone, how earnestly he feels that the Pact for the Renunciation of War opens to us an

unprecedented opportunity for advancing the cause of disarmament, an opportunity which admits of no postponement.

Any approach to the disarmament problem on purely technical grounds is bound to be inconclusive. The technical justification of armaments is based upon the experience of past wars and upon the anticipation of future wars. So long as the approach to the problem is based upon old fears and old suspicions, there is little hope of disarmament. The lessons of the old strategies must be unlearned. If we are honest, if our solemn promise in the Pact means anything, there is no justification for the continuation of a war-taxed peace. Great armaments are but the relic of another age, but they will remain a necessary relic until the present deadlock is broken and that can be accomplished only by the decision of the Powers possessing the greatest armaments to initiate measures of reduction.

In the opening statement at the Three Power Naval Conference in 1927 I took occasion, in suggesting certain tonnage levels as a basis of discussion, to say that the United States is prepared to agree to a plan for limitation at still lower levels which maintain the relative status of existing treaties with respect to the Powers represented at that Conference. This is still the attitude of my Government and I am authorized to state that on this basis we are willing to agree to any reduction however drastic of naval tonnage which leaves no type of war vessel unrestricted.

A large part of the suggestions for limitation hitherto made seem to have been of such a nature as to sanction existing armaments or even to set higher levels with tacit encouragement to increase existing establishments. This is only a timid expedient and an agreement on the basis of existing world armaments (or at higher levels) can never be justified before enlightened public opinion as a positive achievement.

At best it is purely negative. Fundamentally, our purpose should be to release large numbers of men from military service to productive effort, and second, to reduce the heavy burden of taxation. So long as the nations are burdened with increasing taxation for the maintenance of armaments it is idle to pretend that the world is really advancing toward the goal of disarmament. In recent years the word "limitation" has come to be used chiefly in describing agreements at existing levels or still higher levels, and is generally looked upon as having nothing to do with actual reduction. It is useless to attempt to correct this impression by explaining that limitation may be at any level lower or higher than those existing. As a practical matter, it would seem to be best to accept the general public understanding of these terms. Let us therefore take the bold course and begin by scrapping the term "limitation" in order to concentrate upon a general reduction of armaments.

My Government believes that there can be no complete and effective limitation of armament unless all classes of war vessels, including cruisers, destroyers and submarines, are limited. It could not agree to any method which would result in leaving any class of combatant vessels unrestricted. In its reply, under date of September 28, 1928, to communications from the British and French Governments concerning an understanding reached between them as to a basis of naval limitation, my Government pointed out that this understanding applied to only one type of cruiser and one type of submarine and would leave totally unlimited a large class of effective fighting units. This note also called attention to the American position at the Geneva Naval Conference and the fact that a proposal for general reduction was urged by the American Delegation.

The willingness of my Government, I may even say its eagerness, to go to low levels, is based upon the

fundamental belief that naval needs are relative, namely, that what we may require for our defense depends chiefly upon the size of the navies maintained by others. Aside from the signatories of the Washington Treaty, there is no conceivable combination of naval power which could threaten the safety of any of the principal naval Powers. What justification can there be for the Powers which lead in the respective classes of naval vessels to sanction further building programs in those classes. In the case of the United States we have already expressed our willingness to agree on a basis that would mean a substantial reduction of our present destroyer and submarine types. In the case of cruisers it is only possession by others of greatly superior strength in this class which has led to the adoption of the present building program.

My Government cannot find any justification for the building and maintenance of large naval establishments save on the ground that no Power can reduce except

as a result of general reduction. Let us ask ourselves honestly what these establishments are for. As regards the relations of the maritime Powers among themselves, there is no such need. Even if the danger of war is admitted, it could be guarded against just as well by the maintenance of relative strength at low levels as at higher levels. The principal naval Powers have nothing to fear from the naval strength of the countries nonsignatory to the Washington Treaty. There is no conceivable combination of naval strength among the nonsignatory Powers which need give concern. As an example, the cruiser strength of all the nonsignatory countries is the world does not attain to one-half of the cruiser tonnage of the greatest single fleet.

The people of every country are crying out against the burdens of taxation and demanding the suppression of unnecessary expenditure. My Government is convinced that expenditure for disproportionate naval establishments is indefensible in that it can be avoided

by a sensible agreement among the naval Powers. And we must recognize that the people who pay taxes are bound to feel well-founded resentment against any policy which commits them to needless taxation through failure to reach rational agreements.

My Government believes firmly in its idea that naval needs are relative and that radical general reduction is possible only on the theory of relative needs. I trust that these views may commend themselves to other Governments and that it may be possible to agree upon such reductions. If, however, it is impossible to agree on this thesis, it is obvious that there will remain only the thesis of absolute naval needs. This would mean that all thought of reduction is abandoned, that each country retains a free hand in building with an inevitable tendency toward competition. Surely we can hardly envisage such a sequel to our solemn undertaking to keep the peace.

My Government has always felt that we need no

exact balance of ships and guns which can be based only upon the idea of conflict; what is really wanted is a common-sense agreement, based on the idea that we are going to be friends and settle our problems by peaceful means. My Government has never believed that an effective approach to the problem of disarmament could be made by methods of reduction of armaments alone. It feels that genuine disarmament will follow only from a change of attitude toward the use of force in the settlement of international disputes.

It is for that reason that I venture to make this appeal that the countries here represented examine the whole problem afresh in the hope that they will find in general world conditions and in the solemn obligation they have taken among themselves a reassurance as to their security and that they will find in this the confidence to enable them to dispense with the armaments which hitherto have seemed so essential.

34 昭和4年4月(24)日 在米国出淵大使より
田中外務大臣宛(電報)

ギブソン米国代表の声明に対する新聞論調及び ひ國務長官の記者会見の要旨について

ワシントン
本 省 4月24日後着

第一二三号

寿府発大臣宛電報第四九号ニ関シ

二十三日ノ主ナル新聞ハ「ギブソン」ノ声明全文ヲ掲クルト共ニ論評ヲ加ヘ右声明ハ軍縮問題ノ将来ニ希望ヲ齎スモノニテ不戦条約ハ軍縮促進ノ機会ヲ開ケリトノ点ニ賛意ヲ表スルニ一致シ居レルカ其ノ外費府「レヂア」ハ大統領カ近キ将来軍縮会議開催ヲ希望シ居レルハ明トナレリトシ同声明ハ米国側ニ於テ妥協ノ意アルヲ示シ居レルカ右見地ノ変更ハ軍縮促進ニ多大ノ貢献ナリト述ヘ紐育「サン」ハ本声明ハ要スルニ軍縮協定ハ各国ノ相対的必要ヲ基礎トスヘキコトヲ明ニセリトナシ紐育「タイムス」ハ軍縮ノ技術的見地ヨリ取扱フノ誤ヲ繰返ス可カラストセリ

猶國務長官ハ新聞記者会見ニ際シ米国ハ不戦条約カ各国民ニ及セル影響ヲ利用シ軍縮ノ達成ヲ期セムトスルモノニ

テ米國ノ立場ハ三国会議以來變更無ク各艦種ニ渉ル縮小ヲ
歡迎スルモノナルカ比率問題ヲ根本トスル本声明ノ案ニヨ
ル戦闘力ニ関スル「フォーミュラ」ハ軍縮委員会ニ於テ之
ヲ作成スルヲ得ヘントノ趣意ヲ述ヘタル趣ナリ
英ニ転電セリ
英ヲシテ仏、寿府ニ転電セシム

35 昭和4年4月25日 在仏國安達大使より
田中外務大臣宛(電報)

ギブソン米國代表の声明に対する新聞論調に
ついて

パリ 4月25日後発
本省 4月26日前着

第一二九号

軍縮準備委員会ニ於ケル「ギブソン」ノ声明ニ関シ
当地新聞論調ハ一般ニ右声明カ一昨年ノ「ポール、ボンク
ー」案ノ趣旨ヲ認メ居ル事並ニ一時行詰リノ感アリタル連
盟ノ軍縮事業ハ本件声明ニ依リ活路ヲ見出スニ至レル事等
ヲ指摘シテ慶賀ノ意ヲ表スルモノ多キ処二十四日(「タン」
「デバ」其ノ他)之ニ反シ二十五日「エコ、ド、パリ」ハ

「ギブソン」ノ声明ハ実質上客年ノ英仏海軍協定ニ関スル
米國政府ノ対仏回答ト同一ニシテ英米兩海軍ノ相反スル要
求及仏伊兩國ノ相異ル立場ヨリ生スル困難ニ対シ何等ノ解
決ヲ与ヘ居ラスト述ヘタル上右ニモ拘ラス本件声明カ多大
ノ反響ヲ見ルニ至レルハ英國ノ総選挙ニ當リ選挙民ニ対シ
英米間ニ何等妥協成立セルカノ如ク見セ掛ケントノ魂胆ニ
基クモノナリト結論セリ
米ニ転電シ英仏ニ郵送セリ

36 昭和4年4月(26)日 在米國出淵大使より
田中外務大臣宛(電報)

ギブソン米國代表の声明に対する新聞論調に
ついて

ワシントン
本省 4月26日後着

第一二七号

往電第一二三号ニ関シ
当國新聞ハ二十四日ヨリ二十五日ニ亘リ英外相カ「ギ」ノ
提案ニ賛意ヲ表シ伊國側ニテハ仏國ト同比率ヲ要求シ居リ
又日本当局ハ五五三ノ比率ニハ満足シ居ラス等本件声明ニ
対スル各方面ノ反響ヲ詳細報道スルト共ニ當國ニ於テハ下

院海軍委員長「ブリッテン」カ「ギ」ノ声明中海軍勢力算
定ニ當リ商船及根拠地ヲ度外視セリト非難セル声明ヲ發シ
議員中大海軍論者ハ五五三ノ比率ニ依ラサル條約ハ上院ノ
賛同ヲ得サルヘシト語レル旨等ヲ伝ヘ居レルモ官辺ニテハ
米國政府ハ少クトモ只今ノ処軍縮會議ノ開催ニ就テハ何等
考慮シ居ラス寿府ニテ将来ノ協定ノ基礎ヲ發見シタキ意向
ヲ有スルニ過キス大統領モ二十三日ノ定例会見日新聞記者
ニ対シ右同様ノ趣旨ヲ語レル旨ノ記事ヲ掲ケ居レリ

尚新聞論調ハ引続キ前電同様本声明ニ讚辞ヲ呈シ居レルカ

紐育「ヘラルド、トリビューン」及市俄古「デーリー、ニ
ュース」ハ米國ハ何レニスルモ華府條約ノ比率維持ヲ要求
スルモノナリトノ趣旨ヲ述ヘ費府「レッヂャー」ハ軍縮ニ
関スル根本的衝突ハ英米間ノミナラス政治家ト専門家トノ
間ニモ存ス本声明ハ軍縮問題ノ専門家ノ手ヨリ政治家ノ手
ニ移シタルモノトシ紐育「ワールド」ハ英國ヨリ米國ニ対
シ讓歩ヲ要求セントセハ米國內ニ反對ヲ招クハ極メテ容易
ナルモ共和黨政府ヨリ出セル妥協案ニ対シテハ攻撃困難ナ
ルヘク「ブリッテン」等ノ反對アルモ「フーバー」ノ意向
ハ米國民ノ支持ヲ受ケ居レリト述ヘ華府「ポスト」ハ各國

ノ相對的要求ノ算定ニハ多大ノ困難ヲ伴フコトヲ予想シ居
リ「ジョルナル、オブ、コンマース」ハ軍縮ノ將來ハ英米
兩國ノ確執ニ係ルモノナルカ右確執ノ根元タル兩國ノ商業
競争ハ將來益々激烈トナルヘキ処不戰條約ニ依リ米國カ侵
略國ニ対シ何等措置ヲトルヘキ公ノ保障ヲナササル限り同
條約カ軍縮ニ貢獻スルト見ルハ疑ノ余地アリト述ヘ居レリ
英ニ転電シ英ヲシテ仏、伊、寿府ハ転電セシム

37 昭和4年4月26日 在米國出淵大使より
田中外務大臣宛(電報)

軍縮準備委員会の性格に鑑み比率問題の根本
的論議は他日に譲るを得策とすべき旨稟申に
ついて

ワシントン 4月26日後発
本省 4月27日前着

第一三一号

「ギブソン」ノ声明ニ対スル當國ノ情勢ハ往電第一二三号
及第一二七号申進ノ通ニテ輿論中ニハ比率問題ニ付論議ス
ルモノアルモ之トテ協定成立ノ曉ニハ英米同比率タラサル
ヘカラストノ点ニ重キヲ置クモノニシテ當局ニ於テ往電第

一三〇号ニテ御承知ノ通準備委員会ニテハ単ニ将来ノ討議ノ基礎トナルヘキ原則ヲ発見シタキ意向ニシテ夫レ以外進捗スヘキ見込ヲ有シ居ルモノトモ見ヘス右米國側ノ態度ハ今後關係各國ノ出方其ノ他ニ依リ幾分變更ヲ見ルカ如キコトアルヤモ測リ難キモ直ニ比率問題ニ關スル根本的論議ニ進捗スルヤハ甚タ疑問ナリト存ス從テ我方ニ於テ今回ノ委員會ニ於テ比率問題ヲ捉ヘテ彼此反駁ヲ試ミルカ如キハ偶々米國新提案ニ対スル研究ノ先ヲ鈍ラスコトナルノミナラス局面ノ紛糾ヲ招キ却テ我立場ヲ不利ニ導ク虞アリト思考ス

就テハ佐藤公使發大臣宛電報第五三号内ノ上申ノ次第アルモ委員會ニ於テ比率問題ニ付我方ノ態度ヲ言明セサルヘカラサル場合ニモ其ノ点ハアツサリト留保スルニ止メ根本的論議ハ他日ノ場合ニ譲ル方得策ナルヘシト存ス

寿府ニ転電シ寿府ヲシテ英仏伊ニ転報セシム

38 昭和4年4月27日 在ジュネーヴ佐藤連盟事務局長より
田中外務大臣宛(電報)

軍縮準備委員会における海軍問題の処理方に
關シギブソン及びカッシエンダンとの談話に

箇國ニ限定スルコト困難ナルノミナラス各海軍國政府間ニ予備的意見交換無クシテ小委員会ヲ開クモ不成功ニ終ルヘキハ明白ニ付時機熟シタル頃ヲ見計ヒ準備委員會議長ニ主要國ヨリ之ヲ通知シ準備委員會ヲ開催スル方得策トスヘク其ノ時機ハ何レ連盟総会後トナルヘシ云々

右ニ對シ本官ハ

(一)ハ全然賛成

(二)比較案ノ通牒ヲ得ハ之ヲ政府ニ移牒スヘク其ノ研究ニ數箇月ヲ要スルハ当然ナリ而シテ疑義ノ点ニ關シテハ華府ニ於テ直接米國政府ニ説明ヲ求ムルヲ適當且捷徑トスト思考ス(此ノ点「ギ」ハ全然然リト云ヘリ)

(三)小委員会ノ構成ニハ本官個人トシテハ寧ろ賛成ナルモ目下請訓中ニ付政府ノ態度トシテ意見申述難シ但シ米國側ノ懸念モ相当理由アリ五大國ニ限定シ得サレハ却テ紛糾ヲ増スノミナラムト述ヘ何レ訓令ニ接シ次第帝國政府ノ態度通報スヘシト付言セル処「ギ」モ同様本官ト連絡ヲ保ツヘク但シ前述自分ノ所見ハ決シテ纏リタル考ニ非ス他國ノ態度如何ニ依リ變更シ得ヘキモノ

ついで

ジュネーヴ 4月27日後発
本省 4月28日前着

第五七号(至急極秘)

二十六日何レモ先方ノ求ニ依リ「ギブソン」及「カッシエンダン」ト各別ニ面談ス

一、「ギブソン」トノ会谈要領

彼先ツ曰ク海軍問題ノ片付方ニ關シ先以テ日本側ト意見交換ヲ希望スル次第ニテ自分ノ考ニテハ

(一)今回ノ準備委員会ニテハ一切討議ヲ為サルヲ可トシ
(二)海軍力比較案ハ自分ハ委員會ニテ公然発表ヲ希望シタルモ「カッシエンダン」ニ難色アリ(後述ノ通)依テ各海軍國政府ニ限リ之ヲ交付スヘキヤ或ハ委員會列席者全部ニ配布スヘキヤニ付請訓中ナリ之ヲ発表セサレハ前言ヲ食ム事ナルモ已ムヲ得ス兎ニ角同案ノ研究ニハ各國政府ニ於テ相当ノ日時ヲ要スルハ当然ニ付何レノ場合ニ於テモ海軍問題ノ討議ハ數箇月後ノ事トナルヘシ

(三)關係國ノ小委員会構成説出テタルモ參加國ノ範圍ヲ五

ニシテ仏、伊トモ同様意見交換スヘシト述ヘタリ

二、「カッシエンダン」トノ会谈要領

二十二日朝「ギ」ノ声明ハ全ク自分(カ)ノ意表ニ出テ其ノ前日同人來訪明日声明ノ次第ハ話アリタルモ詳細ノ内容ニハ言及セス從テ左程重要ナルモノトハ思考セサリシ旨不平ノ態度ニテ前置シ次テ客年準備委員會後英仏協定ノ進行ニ關シテハ常ニ本官ニ進行ノ狀況ヲ通告スヘシト約言セル行懸アリ且日本側ノ不意ニ出テサラムカ為茲ニ左ノ通御話スル次第ナリ尤モ右ハ政府ノ確平タル訓令ニ依ル次第ニアラサルカ故ニ他日時宜ニ依リ變更スルコトアルヘキ点予メ承知セラレタシト述ヘタル後左ノ言ヲ為セリ

(一)英國政府ハ総選挙ヲ控ヘ目下海軍問題審議ノ地位ニ非ス但シ米國政府ノ態度モ判明シタル今日先ツ以テ同國政府ト直接私的会谈ヲ試ミタリ其ノ結果満足ナル仮協定ニ達スレハ之ヲ日本初メ仏伊ニ通告シ五國間ニ意見交換ヲ行ヒタル後更ニ準備委員會ニ報告スルコトトシタシ

英仏協定ノ場合モ同シク兩國政府意見交換ニ始マリタ

ル次第二ニテ三国会議ノ失敗ハ予備的交渉ノ欠如ニ基ク
カ故ニ今回ハ別ノ方法ニ依ラムトスル次第ナリ

(二)米ノ比較案ハ五大国ニ限り之ヲ通牒セシムヘク然ラサ
レハ新聞等ニテ直ニ問題トナリ各自勝手ノ計数ヲ算出
シ始末付カサルニ至ルヘシ但シ該案其ノモノニ対シテ
ハ英国側ハ寧ロ多大ノ興味ヲ感スルモノニシテ或ハ艦
種別ニ依ル噸数制限モ本案ノ適用ニ依リ公平ニ近キ比
較及制限ヲ為シ得ルヤモ計リ難シ

(三)兎ニ角同案ニ対シ充分ノ研究ヲ加ヘタル後英ハ米ト直
接交渉ヲ試ムヘク但シ右ハ日本其ノ他ノ関係国カ同様
米ト直接意見交換スルヲ妨クルモノニ非サルハ勿論ナ
リト云ヘリ

依テ本官ハ(一)ノ英米間直接交渉ニ関シテハ本国政府ノ
訓令ヲ有スル次第ニ非サルカ故ニ何等政府ノ所見ヲ述ヘ
得ル地位ニ非サルハ勿論ナルモ右ノ如キ交渉方法ハ日本
側トシテハ余リ歓迎セサルヘシ

蓋シ英米間ニ一ノ妥協成立ノ場合仮令仮協定ナリトスル
モ日本其ノ他ニ於テ後ヨリ之ヲ変更スルコト不可能ナラ
ストスルモ困難ナルヘク又日本トシテハ米國ト二国限り

英、米、仏ニ転電シ独、伊ニ暗送セリ

39

昭和4年4月27日 在ジュネーヴ佐藤連盟事務局長より
田中外務大臣宛(電報)

軍縮準備委員会における海軍問題の処理方

に関する折衝とこれに対し執るべき態度請訓に

つゝ

ジュネーヴ 4月27日後発
本 省 4月28日後着

第五八号(極秘)

往電第五七号ニ関シ

(一)同電(二)記載ノ英米直接交渉案ハ「カッシエンダン」「ギ
ブソン」間ニ話経リタル後本官ニ通告シタルモノナリヤ
否ヤハ付度ノ限りニ非サルモ英ノ態度ハ二十四日頃到着
セル政府ノ訓令ニ基ケルコト疑ナク又英ヨリ米國政府
ニ直接交渉ヲ申入ルルニ於テハ米モ喜ムテ之ニ応スヘク
「ギブソン」カ連盟ノ権域内ニ於テ海軍問題ヲ議セムト
スル主張モ終局ノ時期ニ至リ同問題カ準備委員会ニ復帰
スル関係上別段支障ヲ受クル訳ニ非ス況ンヤ米自身モ小
委員会ヲ欲セス先ツ関係国間ノ意見交換ニ依ラムトスル

ニテ海軍問題ヲ議スルヲ好マサル事情アルヤモ知レス此
ノ見地ヨリスレハ或ハ少クトモ日英米三国間ノ会商ヲ希
望スルヤモ計ラレス又此ノ場合ニハ英米間ノ會議進行ニ
伴ヒ日本ノ利益ヲモ同時ニ之ニ適合セシメ得ル便利アリ
加フルニ三国會議ノ例ニ徴スルモ英米間ニ多大ノ困難ヲ
来シ却テ日本ノ介在ヲ便トスルコトアルヤモ知レスト述
ヘタル処「カ」ハ日本側ノ考モ一応御尤モ乍ラ五国間ニ
交渉ヲ開始セントセハ先ツ予備的交渉ヲ為ササルヘカラ
ス結局各国各自米國ト意見交換スル外無カルヘク必スシ
モ英米間ニ限り先ツ話ヲ進ムル絶対的必要ハ之ヲ認メス
ト答ヘタルニ付本官ハ更ニ(イ)英米会商ノ場合其ノ進行ノ
模様ハ出来ル丈詳細ニ之ヲ日本側ニ通告セラルヘキヤト
問ヒタルニ勿論爾リ取計フヘシト答ヘ(ロ)英米会商ト前後
シテ日米交渉ヲ試ムル事ナリテモ英国側ニ異議無カル
ヘキヤト念ヲ押シタル処全然異議無キノミナラス大イニ
必要ノ事ナリト認ムル旨答ヘタリ依テ本官ハ詳細政府ニ
電報シ其ノ指揮ヲ請フヘク何分ノ儀訓電接手後申述フヘ
シトテ引取レリ

本件ニ関スル卑見別電第五八号ヲ以テ申進ス

ニ於テ一層本件直接交渉ノ可能性ヲ増大スルモノト云フ
ヘシ

(二)但シ英米間ノ妥協ハ動モスレハ我ニ不利ノ結果ヲ齎スヘ
キヲ虞レ二十七日詳細ノ事情ヲ杉村公使ニ内報シ同公使
ヨリ「ドラモンド」ニ対シ最モ緊切ナル関係ヲ有スル英
米二国間ニ於テ最モ熱心ニ妥協点ヲ見出サムトスルハ当
然ナルモ両国間ノ仮協定案ヲ以テ其ノ仏伊ニ臨マムトス
ル如キハ宛モ両国連合ノ勢力ニ依リ他ヲ圧倒セムトスル
モノナルヤノ感想ヲ与フヘク不安ノ念ニ堪エサルニ付
「カッシエンダン」ニ再考ヲ求メラルル様切望スル旨申
入レタル処「ド」モ全然同感ニテ英国カ終始日本ト協調
ヲ保チ進ムヘキ必要アル点「カ」卿ニ申入ルルト同時ニ
倫敦滞在中(「ド」ハ少数民族関係三人委員会ニ列席ノ
為二十七日發倫敦ニ向フ)特ニ此ノ点ニ付誤算ナキ様尽
力スヘシト約セル由ナリ

(三)上記ノ杉村「ドラモンド」会見ノ結果ト見エ「カ」卿ニ
同行セル英外務省米國局長「クレージー」二十七日日本官
ヲ来訪前日「カ」卿及本官会谈中本官ニ於テ英米直接交
渉案ニ対シ懸念ノ点アリタル様子ニ見受ケラレタル処英

国政府ハ此ノ度コソハ米ト満足ナル妥結ニ達セムト切望スルモノニシテ從テ成功確保ノ為先ツ米ト妥協点ノ発見ニ力メムトスル外他意ナク決シテ日本其ノ他仏伊ノ利益ヲ度外視セムトスルモノニ非ス故ニ会議進行ニ関シ常ニ日本ニ情報ヲ与フヘク又日米間ノ直接交渉モ決シテ妨害セサルヘシ英國政府ハ米新内閣ノ成立ト同時ニ起リタル政策轉換ヲ好機トシ此ノ機ヲ逸セス妥協ニ達セムトスルモノニシテ又其ノ可能ナルヲ信ス比較法ノ如キモ英國側ニテモ之ヲ案出シ米ノ分ト互ニ比較研究セムトス但シ其ノ場所ハ倫敦華盛頓ノ何レトモ予メ限定スルヲ得ス尚英ノ最恐ルル処ハ新聞ニテ勝手ニ論議セラルルニアリテ其ノ為英米ノ妥協点モ他國ニ依リ認容セラルルコト困難トナルヘク殊ニ米國ノ新聞會社然リ故ニ今後ノ進行ハ絶對秘密ニ付ス必要アリト云ヘリ

右ニ對シ本官ハ華盛頓會議ニ於テ日本ノ受ケタル圧迫ト同様ノ遣口ヲ繰返スニ於テハ事前ニ於テ既ニ事ノ成功ヲ危殆ナラシムルモノニシテ本官ノ極力避ケムトスルハ此ノ点ニアリ本國政府ノ意向ハ未タ承知スルニ至ラサルモ英米間ニ直接交渉希望アルニ際シ本邦側力之ヲ妨害セム

結局米國ヲ中心トスル關係國間ノ意見交換ニ依リ互ニ妥協点ヲ発見スルニ努ムル外ナク相当ノ時期到来セハ「ギブソン」ヨリ之ヲ議長ニ通シ改メテ準備委員會開催ノコトトナルヘシ但シ米ノ提案ニ依ル比較法研究ノ段取トナラハ必然ノ結果トシテ比率問題ニ到達スヘク單ニ海軍軍縮ノ方式ヲ定ムル如キ形式問題ニ終ルヲ得ス故ニ米トノ直接交渉ニ依リ妥協点発見ノ曉ハ即チ比率問題解決ノ時ニシテ準備委員會ハ之ヲ承認スルコトトナルヘシト信セラル

尚仏國側ハ「ギ」ノ声明中ニモアル如ク（往電第四九号三ノイ）華府會議ノ比率適用ヲ免カレ相当率ヲ贏チ得ル望確實ナルモノノ如ク此ノ点大ニ安心ノ風アルモ既成事実ノ前ニ置カルル点ハ同シク承認シ能ハサルモノノ如シ前電及本電逐一御考慮ノ上本官ノ執ルヘキ態度ニ関シ至急何分ノ御電訓ヲ請フ

英、米、仏へ転電シ独、伊へ暗送セリ

40 昭和4年4月27日

田中外交大臣より
在ジュネーヴ佐藤連盟事務局長宛（電報）

トスル理由ナシト信スルト同時ニ以上ノ点ニ對シテハ英米側ノ慎重ナル考慮ヲ煩ハササルヲ得スト述ヘタルニ同官モ全然諒解歸英ノ後右ノ次第直ニ大臣ニ上申シ日本側ノ不安ヲ除クニ尽力スヘシト約シ且今二十七日委員會ニ於ケル米國ノ態度ハ頗ル妥協的ニシテ既ニ陸軍人員ニ對シテモ二十六日ノ聲明ニ依リ既教育兵ニ關スル從來ノ主張ヲ捨テタル程ニ付海軍問題ニ付テモ勿論種々ノ犠牲ヲ忍ヒテ妥結ニ達セムト焦慮シ居ルモノナルヘク從テ比率ノ点ニ於テモ日米間ニ左程ノ困難アルヘシトモ思ハレス何レノ場合ニ於テモ英國外交ハ必要ノ場合日本ノ利益ヲ考慮擁護スルニ咨ナラサルヘシト云ヘリ

四二十六日「カ」卿トノ會談及前記「クレージー」ノ語氣ヨリ察スルニ英ハ米提案ニ多大ノ望ヲ有シ從來ノ噸數ヲ主タル基礎トシテ海軍力ヲ比較シタル方法ヲ廢シ新シキ基礎ノ下ニ均衡ヲ発見スルニ努メントスルモノノ如ク本邦側ニトリテモ或ハ此ノ種ノ新方法ニ依リ比率問題ヲ我ニ有利ニ解決シ得ルヤモ計リ難ク兎ニ角我海軍當局ニ於テ充分研究ニ値スヘキ問題ナリト思考ス而シテ英米共氣乗セサルニ至レル今日五國小委員會案ハ復活ノ見込ナク

軍縮準備委員會におけるギブソン米國代表の

聲明に対する回答方に関し回訓について

本省 4月27日後6時30分發

第一六号（極秘）

貴電第五三号及第五四号ニ関シ

一、米代表聲明ニ對スル貴電第五二号所報貴官聲明ハ帝國政府力述ヘムト欲スル所ノ要旨ヲ大体表明シタルモノナルモ尚ホ適當ナル機會ニ於テ軍縮促進ノ為貢獻セントスル今次米代表聲明ノ趣旨ニ賛辞ヲ呈シ前頭貴官聲明中段ノ趣旨ヲ繰返シ且米代表聲明中軍縮事業ノ本質ハ單ニ軍備ノ制限ニ止マラス進テ之カ縮減ヲ図ラサルヘカラストスル点ハ大ニ同感ニシテ帝國政府從來ノ主張ニモ一致スル所ナル旨ヲ述ヘタル後這回米代表聲明ニ包含セラレタル諸問題中ニハ最モ慎重ナル研究ヲ要スルモノアリ殊ニ現存條約ノ原則ヲ其ノ儘他ノ艦種ニモ適用セムトスルモノナルニ於テハ事ノ性質上極メテ重大ノ問題ト認メサルヘカラスト付言シ夫レトナク華盛頓比率適用ニ不同意ノ内意ヲ開示セラレ差当リノ具體的措置トシテ準備委員會内ニ適當ナル機關（五ヶ國小委員會ヲ指ス）ヲ設ケ此際

第六二号（極秘）
往電第五八号ニ関シ
其ノ後ノ英米直接交渉ノ為日本ノ利益侵害セラルコトナ
キ様精々注意シ杉村公使トモ協力各方面ト連絡手落ナキ様
努メ来レル処仏国側モ我方ト全然同意見ナルコト判明シ旁
英米側ニ対シ可ナリノ衝動ヲ与ヘタルモノノ如ク各般ノ形
勢我ニ有利ニ傾キツツアリ殊ニ二日「ギブソン」ヨリノ午
餐ノ招待ヲ受ケ兩人ニテ可ナリ立入り意見交換ノ機会ヲ得
タリ「ギブソン」ノ態度ハ極メテ妥協的ニシテ三国会議当
時既ニ比率問題ニ関シ日本側カ頗ル神経過敏ナリシヲ看取
セルカ故ニ過般「フーバー」トノ会見ノ際モ本件ニ付熱談
ヲ遂ケタル次第ニテ新大統領ハ海軍当局ニ多少ノ異論アル
ニ拘ラス頗ル広キ見解ヲ持シ日本トノ比率ハ必スシモ絶対
的ナルヲ要セス要ハ比率問題ノ如何ニ拘ラス両国間ニ平和
親善ヲ維持スルニアリトノ言ヲ為シタル位ニテ従テ比率問
題ニ関シテハ「ギブソン」自身モ寧ろ樂觀ヲ有スト述ヘ且
今後ノ海軍軍縮ニ付テモ英米間直接交渉ノ必要ハ之ヲ認ム
ルモ之カ為ニ日本ヲ不利ナル地位ニ陥レントスルカ如キ考

本 省 5月4日前着

海軍問題ノ審議ヲ為スコトニ賛成ナル旨帝國政府ノ名ニ
於テ声明セラレ度シ尚比率、海軍力比較ノ標準、艦種類
別其他ニ関スル詳細ニ付テハ追テ貴官御含ミ迄ニ電報ス
ヘキモ委員會ニ対スル關係ニ於テハ列国就中英仏側ノ態
度等ヲモ見極メタル上ニテ我方ノ意見ヲ発表スルヤ否ヤ
ヲ決スルコトトスヘシ
ナシ
英米仏伊ニ転電シ独露ニ暗送アリ度シ

41 昭和4年4月30日 在仏国河合臨時代理大使ヨリ
田中外交大臣宛（電報）

ギブソン米国代表の声明に対する新聞論調に
ついで

パリ 4月30日後発
本省 5月1日前着

第一三一号
予備後備陸兵ニ関スル「ギブソン」ノ声明ニ関シ当地諸新
聞ハ何レモ右ハ海軍問題ニ関スル同代表ノ声明ト相俟テ米
国最近ノ協調的態度ヲ示スモノナリトシ軍縮問題カ国際連
盟ノ手ニ依リ解決セラルルニ至ランコトヲ期待シ満悦ノ意

ヲ表シ居ル処海軍制限ニ関スル「ギブソン」提案ノ内容其
ノモノニ付テハ時ニ新ナル解決案ヲ示スモノニアラストノ
観測ヲ下シツツアリ（「タン、デバ」等）就中「タン」ハ
往電第一二九号「エコー・ド・パリ」ト略同様ノ趣旨ヲ述
ヘ「ギブソン」ノ提案ハ實際各國ニ割当ツヘキ噸数ニ付一
言モ触レ居ラサルモ此ノ点コソ仏国ノ最重要視スル処ナ
リト論シタリ尚二十七日「エクセルシオル」ハ寿府特電ト
シテ米国代表部ヨリ得タル情報ニ依レハ米國ハ将来自國商
船隊カ異常ナル發展ヲ為スヘキ場合ヲ考慮シ商船隊ニ関ス
ル三国会議當時ノ主張ヲ固守セサル意向ナル旨並ニ今後比
率問題決定ノ一標準トシテ艦齡増加ニ伴フ戦闘力ノ年度割
減退率ニ関スル詳細ナル表ヲ作成スルコトナルヘシト論
セリ
米ニ転電シ寿府、英、伊ニ郵送セリ

42 昭和4年5月3日 在ジュネーヴ佐藤連盟事務局長より
田中外交大臣宛（電報）

英米直接交渉及び比率問題に関するギブソン
との会談について

ジュネーヴ 5月3日前発

ハ毛頭之ヲ有セス大統領トシテ亦米英間ト同時ニ米日間ニ
モ直ニ交渉ヲ開始スルヲ要ストノ考ニテ右ハ米英間ノミニ
事成就スト仮定シ米日間ニ妥協成ラサレハ何等ノ意味ヲ為
ササルカ故ナリト述ヘタリ同大使ノ態度ハ極メテ淡泊ニシ
テ其ノ間何等隔意アルヲ認メス尚海軍力比較ニ関スル米國
案ニ関シテハ本官ハ本邦政府ノ確タル意向ヲ承知セサルモ
海軍当局ニ於テ成ル可ク早く研究ニ從事スルヲ欲スヘキ処
米國政府ハ如何ナル方法ニ依リ之ヲ關係國政府ニ通達スル
考ナリヤト問ヒタル処「ギブソン」ハ華府ニ於テ日本大使
ヨリ直接國務省ニ申出呉ルレハ直ニ該案ヲ交付スルコトニ
本國政府ト打合アリト答ヘタリ又本官ヨリ本件研究ノ後米
國政府ト意見交換ノ必要ヲ認メタル場合日本政府ヨリ海軍
専門委員ヲ華府ニ派遣シ追加的説明ヲ求メシムルコトアル
ヤモ計リ難キ処米國政府ハ右ニ対シ特ニ異議ヲ有セサルヘ
キヤト尋ネタル処全然差支ナク日本側ニテ研究ノ後其ノ必
要如何ニ依リ如何ナル方法ヲ執ラルルモ其ノ自由ナリト答
ヘタリ（海軍委員派遣問題ハ政府ノ御訓令アリタル次第ニ
無之モ本官思付トシテ右ノ如キ質問ヲ試ミタリ）
此ノ機会ヲ利用シ本官ハ去ル四月二十二日ノ貴大使声明ニ

関シ帝国政府ヨリ適当ノ機会ニ其ノ態度ヲ明ニスヘキ旨訓令ヲ受ケ居ル次第ニテ同声明ノ大体ニ関シテハ帝国政府ニ於テ全然同感ナルモ実ハ現存条約ニ依ル各国間ノ現状ニ関スル一節ニ付テハ帝国政府ニ於テ多少ノ異議アル次第御想像ニ難カラサルヘキ処右訓令ニ基キ数日中ニ海軍条項上程ノ際此等諸点ニ付一言スル考ナルモ問題ノ当初ヨリ空気ヲ陰悪ナラシムルハ賢明ノ策ニアラサルヘキカ故ニ比率問題ニハ一切触レス米代表声明中ノ二三ノ点ニ関シテハ帝国政府ニ於テ独自ノ意見ヲ有スルモ海軍問題討議延期ノ此ノ際問題ノ根本ニ入り討議スルヲ避ケ後日適当ノ機会ニ之ヲ譲ルヘントノ概括的留保ニ留メタキ考ナリ右ハ何等誤解ヲ避クル為予メ貴國ニ入ルル旨述ヘタル処同代表大ニ感謝シ日本政府ノ態度鮮明ハ此ノ際最モ機宜ヲ得タルモノトシテ歓迎スヘク但シ同代表ノ声明中現存条約云々ニ言及セルハ単ニ各国海軍力ノ相対的性質(「ルラチビテ」)ヲ交渉セントシタルニ外ナラス決シテ比率問題ヲ固守セントスル意思ニアラサルコト異々モ誤解ナキ様セラレタシ且日本政府ニ於テ比率問題ニ関シ異議ヲ有セラルルハ夙ヨリ承知シ居ル次第ナルモ此ノ点今直ニ議論ニ入ル詎ニモアラサレハ貴説ノ

如ク概括的留保ニ留メラルレハ幸甚ナリト答ヘタリ右会食後予テノ打合ニ依リ英、仏、伊代表来会五国ニテ手続問題ニ関シ意見交換ス(新聞等ニ種々論議セラルルヲ避クル為特ニ秘密ニ落合ヒタル次第ナリ)先ツ「ギブソン」ヨリ本官トノ予備的打合ニ基キタル四日頃海軍条項委員会ニ上程ノ際日本代表ヨリ海軍問題審議延期方提議スヘク英國代表之ニ賛成シタル後自分ハ米國側トシテモ勿論之ニ異議ナク各關係國政府ヲシテ充分考量ノ余裕ヲ与フルコト必要ナル旨ヲ述ヘ且前回該声明ト辻褄ヲ合ス為海軍力比較案ニ関シ一言シ極ク消極ノ声明ヲナスニ止メ以テ討議ヲ延期スルコトニシ度シト述ヘ各代表之ニ賛ス然ルニ英國代表ハ誤解ヲ避クル為一言シ置キタシト前置シ英國政府ハ同代表ニ予メ計ル処ナクシテ米國政府ニ右比較案入手方申込ミタル由後ニ至リ承知セリ右ニ於テ英國政府ノ処置トシテ恰モ他國ヲ出シ抜ク如キ形トナリ甚タ面白カラサルカ故ニ自分ハ直ニ外務大臣ニ電報シ寿府ニ於テ關係國間ニ話合纏ル迄ハ斯ノ如キ措置ハ見合ハサルヘキ旨申送レリト述ヘタリ依テ本官ハ比較案入手ニ関シ前述「ギブソン」トノ单独打合ハアリタルモ英代表ノ言ニ顧ミ他ヲ出抜クカ如キ感シラ

与フルヲ避ケタシト思考シ此等代表ノ前ニ於テ日本政府若

ハ其ノ他ノ政府ヨリ右入手方華府政府ヘ申込ムハ差支ナキヤト念ヲ押シタル処「ギブソン」ハ前言ノ通華府政府ハ喜テ之ヲ交付スヘシト答ヘタリ続テ仏國代表ハ五箇國ノミナラス仏國トシテハ通商海軍國ヲモ考量スル必要アリ依テ例ヘハ西班牙ヨリ同シク入手方申出タル場合ニ米國政府ハ之ヲ交付セラルヘキヤト質問シ「ギブソン」之ニ肯定的回答ヲ与ヘタリ依テ本官ハ斯ノ如クンハ交付ヲ受クヘキ國ノ範圍ヲ定ムルコト不可能ナルノミナラス新聞等ニ漏ルル危険モ多キヲ加ヘ結局關係國間ノ内交渉ヲ重ンセントスル最初ノ趣旨ニ反スル結果ヲ生スルナキヤヲ虞ルト注意シ「ギブソン」モ本官ノ言ニ対シテハ至極同感ナルモ去リトテ本件ノ行懸ニ顧ミ全然他ヲ拒絕スルコト不可能ナルヘク総テハ(不明)政府ノ考量(「デイスクレション」)ニ任スヘシト謂ヒ之ニテ散会ス

英、米、仏ヘ転電シ、独、伊ヘ暗送セリ

43 昭和4年5月5日

在米國出淵大使より
田中外務大臣宛(電報)

米國側の海軍力測定案に対する今後の処理方

について

ワシントン 5月5日前発
本省 5月5日後着

第一四一号(至急、極秘)

佐藤公使発大臣宛電報第六二号及第六三二号ニ関シ

一、「ギブソン」氏ハ米國側ノ海軍力測定案ハ關係國ノ申出アラハ華府ニ於テ之ヲ交付スルコトニ本國政府ト打合セタル旨述ヘタル趣ナルカ右ハ本問題提起当初ヨリノ行懸殊ニ「ギ」カ次回ニ於テ同案ニ付大体ノ説明ヲ為スヘシト述ヘ居ル關係ニ顧ミ甚タ了解ニ苦シム次第ニシテ一方本測定案ニ關スル質疑交渉ヲ当地ニ於テ行フカ如キ事トナラハ其ノ消息自然外間ニ洩レ軍縮會議ノ氣運未タ充分熟セサルニ先タチ茲ニ事態ヲ紛糾セシムル虞アリト思料スルニ付寿府ニ於ケル事情之ヲ許スニ於テハ佐藤公使ニ於テ直接「ギ」ヨリ米國案ヲ入手シ寿府ニ於テ出来得ル限りノ質疑研究ヲ進メ且同時ニ英國代表トモ腹藏ナク意見ノ交換ヲ遂ケ少クトモ先ツ三國間協調ノ基礎ヲ作ルコト得策ナルヘシト思考ス(我海軍専門委員当地派遣ノ件ハ孰レノ途差当リ詮議ノ必要ナカルヘシト存ス為念)二、佐藤公使ニ於テ米國案ヲ入手スルコトナラハ自然他

テ右ノ通声明スルトテ先ツ米提案ニ讃辞ヲ呈シ帝國政府ハ公平且合理的ナル軍縮提案ニ対シテハ総テ最モ慎重ナル考慮ヲ加フヘキコト及軍縮事業ハ単ニ制限ニ止メス實際的縮減ヲ計ルヘシトハ帝國政府從來ノ主張ナルコトヲ述ヘタル上最後ニ尤モ海軍軍縮ノ根柢ヲ構成スル諸問題例ヘハ或ル艦種ニ関スル現存約定ノ基礎ヲナス問題ノ如キモノニ対シテハ帝國政府ノ意見ヲ開陳スルノ時期未タ到達セスト思考ス況ヤ米國新提案ハ海軍力測定ノ方法ノミニ関スルモノナルニ於テ一層然リト述ヘタル処英國代表之ニ次キ海軍問題ヲ以テ軍縮事業ノ進捗ヲ妨ケツツアル唯一ノ障害ナリトスルノ誤解ナルコトハ今次委員会ノ經過ニ徴スルモ明白ナルカ同問題カ依然トシテ最大ノ困難ノ位置タルコトハ疑モナシ然ルニ過日ノ「ギ」氏声明ハ此ノ形勢ヲ將ニ好転セシメタリト云フヘシ該声明ハ確定的提案ヲ含マスト雖モ本問題ニ関シ協定ニ到達シ得ヘキ方法ヲ示セル一ノ Suggestion トシテ大ニ歓迎スヘシトテ英外相最近ノ演説等ヲ引用シテ英國政府ノ同案ニ対スル好意ヲ披露シ只米案審査ノ為ニハ相当ノ時日ヲ要スル事当然ナルヲ以テ本件ハ延期ノ外無カルヘシト述ヘテ熱心ニ我方提案ヲ支持セリ

國代表ニ於テモ入手スルコトナルヘキモ元來米國側ニ於テハ当初ヨリ委員会ニ於テ之ヲ發表シタキ意向ナリシニ顧ミ我方ヨリ此ノ上進テ小國側ノ入手ヲ阻止スルカ如キ態度ニ出テサル方可然ト思考ス

三、寿府三國會議以來米國ノ我國ニ対スル態度及「ギ」ノ今回佐藤公使ニ打明ケタル処ニ顧ミ英、米相謀テ我國ニ圧迫ヲ加ヘムトスルカ如キコトハ容易ニ之有ルマシト考ヘラルト共ニ「ギ」ノ今回ノ声明ハ余リニ世上ヨリ大袈裟ニ取扱ハレタル為當國議員中ニ種々ノ議論起リツツアル模様モアルニ付此ノ際我國ニ於テ各方面ノ形勢ヲ注視シ徐ニ今後ノ方針ヲ決定セラルル方肝要ト存ス

寿府ニ転電シ、寿府ヲシテ英、仏、伊ニ転電セシム

44 昭和4年5月6日 在ジュネーヴ佐藤連盟事務局長より
田中外務大臣宛(電報)

軍縮準備委員会におけるギブソン米國代表の 声明に対する各国代表の発言について

別電 五月六日在ジュネーヴ佐藤連盟事務局長より
田中外務大臣宛第六号
ギブソン米國代表の声明に対する説明

第六五号

往電第六四号ニ関シ

六日午前ノ會議ニ於テ条約案第二条第二節海軍条項ノ討議ニ入ルヤ先ツ本官發言ヲ求メ客月二十二日ノ米國代表声明ハ海軍軍縮問題ノ終局的解決ノ為一新局面ヲ開キタルモノナルコト言フ俟タサルモ問題ノ複雑且重要ナルニ鑑ミ之カ討議ヲ開始スルニ先チ予メ主要關係國間ニ於テ充分慎重ナル研究ヲ行フコト肝要ナルヘク之カ為委員會ハ是等關係國ニ藉スニ多少ノ時日ヲ以テセラレ度ク殊ニ右關係國ノ一タル日本ノ如キ遠隔ノ地ニアルモノニ付テハ殊ニ其ノ必要ヲ加フル次第ナリトテ「ギブソン」氏ノ「サゼッション」ニ関シ一切ノ關係國カ研究ヲ完了スルニ至ル迄本件討議ノ延期方ヲ提議スルト共ニ日本政府トシテハ右研究終了次第何時ニテモ委員會ニ於ケル本件討議ニ参加スルノ用意アルコト勿論ナルコトヲ述ヘ今一時延期ヲ求ムルモ海軍問題ノ急速解決方ニ関シテハ全力ヲ尽スノ決心アル旨ヲ付言シ次ニ「ギ」氏声明ニ対スル帝國政府ノ態度ニ関シ政府ノ名ニ於

ジュネーヴ 5月6日後発
本 省 5月7日後着

次テ仏、伊兩代表モ交々之ニ賛同シタル後米國代表ハ要領別電第六六号ノ趣旨ノ説明ヲ為シ遂ニ海軍問題ノ審議ハ延期ニ決定ス

別電ト共ニ英^(米カ)ニ転電シ英、仏、伊、独ヘ郵送セリ

(別電)

ジュネーヴ 5月6日後発
本 省 5月7日後着

第六六号

別電

一、客月二十二日ノ声明後他ノ政府ニ於テモ米國提案ト同一ノ方法ヲ研究中ナルコト明カトナリ且又本日各国代表ヨリ米案考究ノ為ニハ相当ノ日時ヲ必要トスル旨述ヘラレタリ

二、技術上複雑ナル海軍問題ニ於テ或方法ニ関シ協定ニ到達セムカ為ニハ各国ニ於テ夫々独立ノ研究ヲ遂ケ充分ナル準備ノ後会商スルヲ要スヘキニ付右諸國ニ対シ相当ノ日時ヲ与フルコト蓋シ当然ナルヘシ余ハ他ニ米案ト類似ノ研究行ハレツツアルニ鑑ミ將又他國ノ独立研究ノ自由ヲ束縛セサラムカ為今茲ニ何等詳細ナル提案ヲ為スヲ避ケ単ニ他國政府ノ研究ノ基礎トシテ米國提案ノ概略ヲ再

説スルニ留ムヘシ

三、各単艦ノ軍事的価値從テ或ル艦種内ニ著シク職能ヲ異ニスル数種單艦存在スル場合ニ於テ此等各種單艦ノ合計価値ヲ表示スヘキ比較標準 (Equivalent of value) ノ決定ニ当リテハ簡單且明瞭ニシテ算出及了解ニ容易ナル要素ノミヲ考量ニ入ルヘク第二次の要素ノ考量ニ依リ問題ヲ錯雜セシムヘカラス余ハ過日ノ声明ニ於テ右主要素トシテ單艦排水量砲ノ口径及ヒ艦齡並速力其ノ他ノ要素ヲ提出セリ (因ニ前回ノ声明ニハ排水量口径艦齡ノ三要素ヲ列記シタルニ留マレリ)

四、軍縮達成ノ氣運今日ヨリ盛ナルハナシ吾人ハ此ノ好機ヲ利用シ一日モ早ク行動スルノ必要アルモ不用意ノ討議ニ依リテ此ノ重要且複雑ナル問題ノ健全且有効ナル処理及解決ヲ害スヘカラス

依テ海軍条項ノ審議ハ關係国カ一般討議ニ入り得ヘキコトヲ議長ニ通告スル時期迄之ヲ延期スヘシトノ日英代表ノ提議ニ全然賛同ス

45 昭和4年5月7日

在米出淵大使より
田中外務大臣宛 (電報)

ハ如何ナル事情ニ基ク次第ナリヤト尋ネタル処「ギヤ」ハ稍躊躇シタル後米政府トシテハ今回ノ委員会ニ於テ米国家ヲ評議シ關係国ト充分腹藏ナキ意見ヲ交換シ以テ軍縮會議ノ基礎ヲ作ル事ニ貢獻シタキ切ナル考ヲ有シタルモ何分英國ニ於テハ総選挙ノ關係上此ノ際本案ノ研究討議ヲ好マサル模様ナル為米國側モ今直ニ壽府ニ於テ協議ヲ行フモ其ノ目的ヲ達スルヲ得スト認メ已ムヲ得ス之ヲ見合セタル次第ナリト答ヘタリ

二、次テ本使ハ米国家ハ元來米政府ニ於テ壽府ニテ之ヲ発表スル方針ナリシモノト解セラレ又「ギ」モ其ノ意向ナリシモノト思ハルカ壽府ヨリノ電報ニ依レハ「ギ」ハ佐藤公使ニ対シ日本大使ヨリ國務省ニ申出テアラハ該案ヲ交付スヘシト語リタル趣ナルカ右ハ元來発表スル目的ノモノニテモアリ且我方ヨリ請求スル迄モナク米國側ヨリ当然主要海軍国ニ交付セラルヘキモノト思ハルト語リタル処「ギヤ」ハ往電第一四二号ノ通述ハ無論右ハ出來次第御申出テヲ俟ツ迄モナク之ヲ各國大使ニ交付シ尚今後ノ研究方法ニ付テモ考究スル心算ナリト述ヘタルニ付本使ハ「ギ」カ壽府ニ於テ既ニ米国家ノ大体ヲ発表シ

軍縮の諸問題に関するキャッスル國務次官補
との懇談について

ワシントン 5月7日後
本 省 5月8日後着

第一四三号 (極秘)

往電第一四二号「ギヤッスル」次官補ニ面会ノ際先ツ不戰条約批准問題ニ付懇談ヲ遂ケタル上軍縮問題ニ言及シ壽府ニ於テ會議ノ經過ニ付テハ大体報道ニ接シ居ルモ多少判明シ兼ヌル点モアルニ付何等訓令ヲ有スル次第ニアラサルモ自分一己ノ思付ニ依リ友人ノ間柄トシテ隔意ナキ私談ヲ為シタシト前置シ同官ト意見ヲ交換シタルカソノ大要左ノ如シ

一、本使ヨリ客月二十五日貴官ト会谈ノ際貴官ハ「ギ」ノ声明ハ將來開カルヘキ會議ノ基礎トナルヘキ「フォーミユラ」ノ研究ニ資センカ為ニ為サレタルモノナリト語ラレタルカ (往電第一三〇号参照) 其ノ後壽府ニ於テハ意外ニモ小委員会設置説ハ立消トナリ且又主要海軍国代表者間ニ米国家其ノモノニ対スル意見ノ交換サヘモ行ハルル事ナク其ノ儘準備委員会ノ散会ヲ見ルニ至リタルカ右

タル以上自然四国以外例ヘハ西班牙等ヨリ國務省ニ対シ之ヲ請求シ來ラハ之ヲ交付セラルヘキ筋合ト認メラルルカ如何ト質シタル処「ギヤ」ハ無論交付スルノ外ナシ尤モ話ハ専ラ四国ト進メタキ考ナリト答ヘタリ

三、本使ハ更ニ英國側ニテハ米国家ニ付直接米國ト交渉ヲ重ネ何等カノ一致点ニ達シタキ考ナルカ如キ処昨年以来海軍問題ニ関シ英、米關係緊張セルニ顧ミ右両國間ニ何等カノ解決ニ到達セムコトハ自分ノ衷心ヨリ希望且歡迎スル処ナリ日本トシテハ米国家ノ提示ヲ受ケタル上何等カノ方法ニテ米政府ト懇談ヲ重ネ出來得ル限り協力シタキ考ナリト語レル処「ギヤ」ハ一昨年ノ三國會議以來日本ノ同情的態度ハ米國ノ深く感謝シ居ル処ニシテ日本トノ間ニハ必ス何等カノ方法ニ依リ意見ノ一致ヲ見得ルモノト信スルモ英米ノ關係ニ付テハ御承知ノ通頗ル困難ナル事情アルニ付米國トシテハ特ニ英國トノ間ニ充分意見ヲ交換シタキ考ナリ尤モ英米間交渉ノ經過ハ昨年ノ英仏交渉ノ如ク内密トセス必ス日本ニ対シ隨時御知ラセスヘキニ付此ノ点誤解ナキ様希望スト述ヘタルニ付本使ハ其ノ点ハ充分諒解セリト答ヘ置キタリ

四、本使ヨリ「ジョンス」現ニ寿府ニ在リ日英モ共ニ代表及専門委員ヲ同地ニ派遣シ居ル事ナレハ準備委員会ニ於テ米国家ヲ議スルコトハ或ハ英国側ノ云フ如ク困ル事情アラムモ軍縮問題ニ最密接ナル関係アル日英両代表ニ対シ全然非公式ニ米国家ヲ提示シ委員会ヲ離レテ意見交換ヲ為サシムル事有益ナルヘシト思ハルルニ付現ニ「ジョンス」ノ有スル案ハ未タ成案ニ非ストスルモ不取敢ニ付話ヲ進メ得サルヤト突込ミタル処「キャ」ハ「ジョ」ハ既ニ或程度迄ハ日英側ニ話シタル事ト思ハルルカ只今ノ御話ニ付テハ主義上素ヨリ異存ナキモ「ジョ」ハ直ニ帰米ノ途ニ就クヘキニ付寿府ニテ意見ヲ交換スル事恐ラク困難ナルヘシト思ハルト語レリ

寿府ニ転電シ、寿府ヲシテ英、仏、伊ニ転電シ、独、露ニ暗送セシム

46 昭和4年5月(9)日 在米出淵大使より
田中外務大臣宛(電報)

ギブソン米国代表の声明後の米国新聞論調に
つら

ワシントン

付カサルニ於テハ謬ヲ為スヘシト述ヘ右大問題ハ政治家ノ手ニテ解決スヘキモノナリト論セリ

寿府ニ転電シ寿府ヨリ英、仏ニ転電セシメ独、露ニ暗送セシム

47 昭和4年5月14日 田中外務大臣より
在仏国安達大使宛(電報)

軍縮準備委員会における米国声明に対する任
国の意向確め方訓令について

本省 5月14日後2時発

第六回軍縮準備委員会ニ関スル件

第八八号(極秘)

本大臣英宛第一〇〇号ニ関シ

適当ナル機会ニ於テ貴任国外務大臣ト御面接ノ上米声明ニ関スル意向並措置振リソレトナク御問合セノ上結果回電アリ度ク今後トモ随時貴任国ニ就キ関係国トノ交渉開始ノ有無及推移御探査ノ上其都度電報アリ度シ

本電本大臣ノ訓令トシテ伊ニ転電シ参考トシテ英米ニ転電シ連盟ニ転達独露ニ暗送アリ度シ

第一五一号
往電第一四七号ニ関シ

大統領ハ七日新聞記者ニ対シ寿府準備委員会ニ於テ米国ノ提案カ主要各国ノ支持ヲ得海軍縮小ニ関スル有望ナル結果ヲ得タルヲ喜ヒ本案討議ノ方法ハ未タ決定セラレ居ラサルモ本件ハ早速研究セラルヘキ旨述ヘタル趣ナルカ「タイムス」ノ華府通信ハ大統領ハ老朽艦ノ代艦(建造?)ヲ行ハサル事ニ依リ軍縮ヲ実行シ得ヘシトノ考ナルカ如ク又官辺ニ於テハ軍縮会議ハ一九三一年ノ(会)議ト関係ナク之ヲ開クコトナルヘシトノ意見アル旨ヲ報シ「ヘラルド、トリビューン」ハ当国高官中ニハ寿府ニ於ケル英国代表ノ態度ハ同情ヲ欠クト認メ居ルモノアル由ヲ報シ居レリ尚八日ノ紐育「ウォールド」ハ「ギブソン」ハ一度海軍協定方式決定セハ直ニ之ヲ華府条約ノ比率ニ從ヒ関係国海軍ニ適用シ得ルモノト想定シ居ルモ既ニ日本側ハ五五三ノ比率ニ満足セサルコトヲ明カニシ仏伊側ニモ反対アリト認ムル理由充分ナルニ付米国政府カ方式ノ効果ヲ過信シ技術的問題ノ背後ニ国際政策ニ関スル更ニ大ナル問題ノ存スルコトニ氣

48 昭和4年5月14日 田中外務大臣より
在英国松平大使宛(電報)

軍縮準備委員会における海軍力測定案に関する
英国側の態度打診方訓令について

本省 5月14日後2時15分発

第六回軍縮準備委員会ニ関スル件

第一〇〇号(極秘)

十二日倫敦發連合電報トシテ当地十三日夕刊ハ海軍比較ニ関スル米提案ハ各海軍国ニ交付セラレ目下英専門家ニ於テ研究中ナリトノ趣旨ヲ報シ居ル処(本邦ハ未タ提示ヲ受ケ居ラス)五ヶ国小委員会立消エトナリタル今日最モ心配ナルハ英米直接交渉ノ運ヒ方カ我方ノ受諾ヲ困難ナラシムルカ如キ事態ヲ發生セシメ延イテハ軍縮ノ促進ヲ妨クルコトナキヤニアリ貴大使ハ右事情御含ミノ上貴任国外務大臣ニ就キ米提案ニ対スル英国側措置振リヲ問合ハセラルルト共ニ佐藤局長來電第五七号(三)所報「カッシェンダン」トノ諒解ハアルモ英米交渉ノ推移ニ関シテハ出来得ル限り通報ヲ受ケ度キ旨申入レラレ度シ

仏伊米ニ転電シ仏ヲシテ連盟ニ転達セシメ露独ニ暗送アリ度シ

本省 5月9日後着

49 昭和4年5月15日

在英國松平大使より
田中外務大臣宛(電報)

比率問題及び英米間協議内容の日本への連絡
方に関するチェンバレン外相との会談につ
て

ロンドン 5月15日後発
本省 5月16日後着

第一五七号

総選挙準備及諸般ノ会議等ニテ「チェンバレン」外相多忙
ノ為久シク懇談ノ機会ヲ得サリシカ五月十五日軍縮及支那
問題ニ付会談ノ事ニ約束シ居リタル折柄貴電第一〇〇号接
到セル次第ナルカ本日外相トノ会談要領左ノ通
先ツ本使ヨリ英國政府ニ於テハ米國提案ヲ入手セラレタリ
ヤ又既ニ非公式商議ヲ米國政府ト開始セラレタリヤヲ尋ネ
タル処外相ハ未タ提案ヲ入手セス又何等商議ニ着手セス総
選挙終了迄ハ閣員モ在京セス自分ノ如キモ昨日地方ヨリ帰
リ又明日ヨリ約二週間遊説ニ出掛クル事トナリ居リ目下
底本問題ヲ取上クル能ハス只今ノ処ハ英國側ニ於テモ海軍
力比較ノ標準ニ付テ折角自國案ヲ起草中ト云ヘリ

用スル事ヲ押付ケラルル如キ事態ヲ心配シ居ル次第ナル旨
ヲ述ヘタルニ外相ハ自分ハ判然トハ申シ兼ヌルモ比率ノ問
題ニ付テハ寿府會議ニ於テ「ブリッジマン」ハ幾多ノ譲歩
ヲ日本ニ為ス用意アリシ如ク記憶ス自分ハ米國ノ立場ニ付
言ヒ得ル地位ニ非サルモ同國ノ新聞其ノ他ニ現ハレタル調
子ニ依レハ或ハ米國側ニテハ華府條約比率ヲ他艦種ニモ適
用スヘキモノト考ヘ居ルヤモ知レサルニ付本件ハ適當ノ機
会ニ日本政府ヨリ米政府ニ対シ談合セラルル事然ルヘキカ
ト存ス何レニセヨ英、米間ノ商議ハ前述ノ通兩國間海軍力
比較ノ標準ニ付会談スルモノニシテ他政府ノ比率問題ニハ
触レサル積リナリト説明シ尚軍縮問題ニ対スル日本ノ協調
的態度ハ英國政府及海軍當局ニ於テ多トシ居ル次第ニテ右
商議ニ関シテハ日本政府ト連絡ヲ取ルヘシト云ヘリ
仏、伊、米ニ転電シ仏ヲシテ連盟ニ転電セシメ露、独ニ暗
送セリ

50 昭和4年5月17日

在仏國安達大使より
田中外務大臣宛(電報)

海軍軍縮會議に関するベルトロの内幕につ
いて

本使ハ海軍軍縮問題ニ関シ日、英、米間從來ノ密接ナル関
係ニ鑑ミ互ニ腹藏ナキ意見交換ノ必要ナルヲ述ヘタル上
英、米間ノ商議ニ於テ日本ヲ度外視シ英、米間ニ定メタル事
ヲ押付クル如キ事アリテハ問題ヲ紛糾セシムル虞アルニ付
商議ノ模様ハ日本側ヘ充分ニ通報セラレタキ旨申入レタル
ニ外相ハ今回米國ノ提議ハ海軍力比較ノ標準決定上伸縮性
ヲ有スルヲ以テ從來關係國間ニ存在セル困難ヲ除ク事ニ於
テ頗ル有望ナリト思考ス而シテ英、米間商議ノ目的ハ兩國
間ニ横ハル從來ノ困難ヲ除去スル為ニシテ關係國ニ対スル
「ルール」ヲ發見スル為ニ非ス即チ英、米間ノ比率ニ付テ
ハ問題ナキモ海軍力比較ノ標準ニ付從來意見一致セサリシ
モノニシテ此ノ点ニ付テ双方ノ案ヲ比較シテ妥協点ヲ見出
サムトスル趣意ナリ英、米間ノ商議ニ於テ他國ニ対スル陰
謀ヲ為スカ如キ事ハ全然無キニ付日本政府ニ於テモ安心セ
ラレタシ尚如何ナル形ニ於テ商議ヲ開始スヘキヤハ未タ決
定セサルモ自分ノ考ニテハ米國政府ノ希望ニ副ハサルヘカ
ラスト思考スト云ヘリ

本使ハ更ニ率直ニ云ヘハ日本ニ於テハ華府條約ノ比率ニ付
今日迄不滿ノモノモアリ殊ニ其ノ比率ヲ其ノ儘他艦種ニ適

第一五七号

貴電第八九号ニ関シ

十七日「ベルトロ」カ本使ノ問ニ対シ内話セル処大要左
ノ通

一、仏國政府ハ未タ米國案ヲ入手シ居ラサルカ右ニ付テハ
仏國政府ニ於テモ充分注意シ居ルモ今日迄ノ処歐洲何レ
ノ國モ入手シ居ラサル模様ナリ

二、將來万一英米間ノ直接交渉ノミ進行シ吾人ニ対シ既成
事實ヲ押付クルカ如キ事トモナラハ却テ軍縮ノ成功ニ禍
ヲ及ホスニ至ルヘク仏國政府トシテハ五大海軍國間ニ一
般的協議ヲ行フニ至ラムコトヲ希望シ居ル次第ナルカ英
國政府ニ於テモ総選挙終了迄ハ何等確定的方針ヲ建テ得
サルヘシト想像ス又本件ニ関シテハ今後日仏相互ニ隔意
ナク情報ヲ交換スルコト致シタシ

英、米、伊ヘ転電セリ
連盟事務局ニ転報セリ

パリ 5月17日後発
本省 5月18日前着

51 昭和4年5月17日

在イタリヤ松田大使より
田中外交大臣宛（電報）

海軍軍縮會議に関するグランディ外相との会談について

ローマ 5月17日後発
本省 5月18日前着

第四二号

在仏大使宛電第八八号ニ関シ

十五日「グランジ」ト会談シタルカ伊国政府ハ未タ何等ノ措置ヲ採リ居ラス又所謂海軍比較米国家ナルモノ入手シ居ラサル由ナリ尚本件ニ関スル彼ノ感想トシテ曰ク過般ノ「ギブソン」ノ宣言ハ具体的ニハ非サルモ此ノ調子ナラハ軍縮會議ハ其ノ内ニハ開カレ得ル機運ニ向フヘント思ハル（自分ハ依然軍縮會議ニ付悲觀の見解ヲ持シ居タリ）結局總テノ問題ハ會議ニ於テ議定スルコトナルヘキカ海軍問題ニ関シ予メ妥協的地歩ヲ作り置クノ案ハ可ナルモ此ノ際例ヘハ英米カ勝手ニ妥協シテ之ヲ他ニ強ユル様ナ遣口ハ敢テセサルヘシ昨年伊国ハ英仏協定ニ対シ大々的ノ反対ヲ為シタルカ之ニハ懲リタルヘシト謂ヘリ
本使ハ一己ノ意見トシテ国別ニ話合フニシテモ爾余ノ大國

在英

特命全權大使 松平 恒雄（印）

外務大臣男爵 田中 義一殿

軍備縮少問題ニ関スル英国三大政党首領声明

報告ノ件

今般ノ総選挙ニ当リ平和主義者ハ英国ノ輿論ヲ國際平和ノ方向ニ導カント努力シ居レルカ五月十六日軍備縮少宣言書委員會ハ後記ノ如キ宣言書ヲ發表シ右ニ対シ保守党労働党及自由党首領ハ夫々声明書ヲ發表シ之ニ答フル所アリタリ

右軍備縮少宣言書委員會ハ本年二月末倫敦ニ於テ開催セラレタル「The Peace Committee of the Society of Friends」ノ決議ニ基キ組織セラレ前記宣言書ヲ發表スルニ至リタルモノナルカ該宣言書ハ

Lord Aberdeen and Tennair

Lord Cecil of Chelwood

Lord Balfour of Burleigh

Lady Oxford

Mr. Bernard Shaw

間ニ連絡ヲ執リ時宜ニ応シテ話合ノ進行ヲ通報スル事トセハ大局ニ於テ全般ノ一致ニ到達スルノ捷徑ニシテ相互間ノ疑惑ヲ除去シ本件ノ円満ナル進行ノ為ニモ効果アルヘシト云ヒタルニ彼ハ至極同感ナリト述ヘ關係國間ニ此ノ点ニ付諒解ヲ遂クルモノ一案ナリト云ヘリ尚彼曰ク海軍問題ニ付テハ伊国ニハ地中海問題ト云フ重要ナ關係アリ之ハ主トシテ仏國ノ事ナルカ此ノ点ニ付一致ニ達スルカ又ハ伊國ヲ満足セシムル必要アリト述ヘ此ノ点カ或ハ伊仏懸案解決ノ話合（從來ヨリ困難ナル進行ヲ続ケ居レリ）ノ際多少触レラレ居ルカ如キ感想ヲ本使ニ与ヘタリ
英、仏、米ニ転電シ仏ヲシテ連盟ニ転報セシメ独、露ニ暗送セリ

52 昭和4年5月27日

在英國松平大使より
田中外交大臣宛

平和主義者の軍備縮小宣言書及びこれに対する三大政党首領声明書について

普通第二九〇号

（六月十七日接受）

昭和四年五月二十七日

Mr. H. G. Wells

Mr. Wickham Steed

The Bishops of Birmingham and Woolwich

General Higgins of the Salvation Army

等各方面ノ多数有力者ニ依リ署名セラレ重要視スヘキモノト思考セラル該宣言書及右ニ対スル各政党首領声明書要旨左ノ如シ

一、軍備縮少ニ関スル宣言書要旨

國際連盟ニ依リ一般的軍備縮少ヲ實現セントノ企画ハ今日迄ノ処失敗セリ而シテ總テノ情勢ハ戦争ノ主要原因タル軍備競争ヲ再ヒ開始セントスルノ風ヲ示セリ若シ不戰條約ニシテ遵守セラルヘキモノナルニ於テ軍備ハ警察ノ目的以外其ノ用ナク今日殘レルモノハ紛争ヲ平和的ニ解決スル條約ニ依リテ不戰條約ヲ補ヒ之ヲ完成セシムルコト之ナリ

右事態ニ鑑ミ吾人ハ英國政党政首領ニ対シ軍備縮少ノ徹底的措置カ極メテ必要ナルコトヲ主張セントス右達成ノ為英國政府ハ第一ニ速ニ陸海及空軍ノ大軍備縮少ヲ熱心ニ主張シ第二ニ何レノ國トモ何等ノ除外ナク一切ノ紛争ヲ

平和的方法ニ依リ解決スルノ条約ヲ締結センコトヲ提議スルコトニ依リ其ノ先導者トナルコトヲ得ヘク又ナルヘキモノナリ

特ニ英國政府ハ英米両国及國際連盟ニ依リ侵略国ト認メラレタル国ニ対スル場合ヲ除キ海洋自由ノ原則ヲ承認スルコトニ依リ英米両国間ノ海軍競争ヲ惹起スル危険ノ根源ヲ打破スヘキナリ吾人ハ目下政府ハ現在及将来ノ戦争ヨリ人類ヲ開放スヘキ未曾有ノ好機會ヲ有スルモノナリト信ス然レトモ此ノ好機ハ去リ易ク将来ノ文明ノ進歩ハ政府カ遲滞ナク此ノ好機ヲ捕フルヤ否ヤニカカレリ

二、保守党首領「ボールドウィン」回答声明書要旨

英國政府ハ最近ノ陸軍軍備縮少準備委員会ニ於テ陸軍軍備縮少ノ進行ヲ容易ナラシムル為陸軍ノ決定セル意見ニ反対シ其ノ意見ヲ固執セサルヘキ旨及大陸諸国ノ協定セル軍備縮少案ヲ受諾シ得ト思考セル旨表明シテ決然タル措置ヲ執レリ

英國カ真ニ誠意ヲ有スルコトヲ示ス為英國ノ軍備ヲ直ニ縮少セサルヘカラストノ議論ニ関シテハ英國政府ハ既ニ其ノ軍備ヲ著シク縮少シ何レノ国ト比較スルモ我軍縮実

云フコトヲ得ヘシ

平和的方法ニ依リ紛争ヲ解決スルノ条約ヲ他国ト締結セサルヘカラストノ論ニ対シテハ「ケロツグ・パクト」ニ依リ吾人ハ既ニ世界ニ対シ之ヲ約束セルコトヲ指摘セサルヘカラスト他ノ条約ニ於テ同様ノ義務ヲ受諾スルノ可否ハ提議セラレタル条約ノ字句如何ニカカレリ

不戦条約ヲ三月二日既ニ批准シタルヲ以テ英國政府ハ戦時ニ於テノミ適用セラルヘキ法則ヲ準備スルノ目的ヲ以テ商議ヲ為スコトハ之ヲ緊急ト認メス

労働党首領「マクドナルド」声明書要旨

不戦条約ハ勿論直ニ満足ナル軍備縮少条約ヲ締結スル為其ノ理由トシテ利用セラレサルヘカラスト海洋自由ノ原則ノ問題ハ不戦条約調印及海軍力ノ発達ニ鑑ミ全然新シキ事態ニ入レルモノト思考ス英米間ニ完全ナル協定ヲ成立セシムルコトハ今ヤ可能ニシテ且直ニ協定セラレサルヘカラストト信ス

自由党首領「ロイド、ジョージ」声明書要旨

余ハ軍備制限ニ非シテ軍備ノ大縮少ヲ為スヘシトノ主義ヲ熱心ニ支持セルモノニシテ最近屢次公ニ之ヲ唱道セ

行ノ大ニ優レルモノアルヲ指摘セサルヘカラスト

海軍ハ一九一四年ニ比較シ人員ニ於テ四万六千二百人軍艦數ニ於テ七百ヨリ四百ニ噸數ニ於テ二百五十萬噸ヨリ百五十萬噸以下ニ減少セリ右ハ一九一四年ニ比較シ其ノ海軍ヲ拡張シ居レル米、日、伊ト比較シ英國軍縮ノ程度ノ優レルコトヲ示スモノナリ

常備軍予備軍及地方軍ヲ含ム陸軍總兵力ハ一九一四年ノ七十二萬三千人ニ比較シ現在ハ四十七萬人ニシテ二十五萬人ヲ減少セリ空軍ニ付テハ戦前独立セル空軍ナカリシヲ以テ比較不可能ナルカ陸海及空軍全部ヲ合計シテ比較スレハ一九一四年ヨリ其ノ兵力ハ二十六萬九千人減少シ居レリ一九二五年以來英國政府ハ米、伊、独、仏、露等ノ諸国カ五百万磅乃至四千万磅ノ陸軍費ヲ増加シ居レルニ四百万磅ヲ減少セリ一九二四—二五年ノ労働党内閣ノ予算ニ比較シ現政府ハ軍事予算總計ニ於テ一年ニ付七百五十萬磅少ク支出シ居レリ

斯クノ如ク良好ナル事績ヲ挙げ軍備縮少ニ依リ世界平和促進ノ希望ヲ實際ニ示シタルモノ他ニナシ英國政府ハ真ニ世界ニ範ヲ示シ軍備縮少ノ先導者トナリ来レルモノト

リ余ハ又米國ト最モ友好ナル關係ヲ發達セシメンコト及目下往々ニシテ意見ノ相違ヲ生セシムル一切ノ海上問題ニ関シ友誼的ノ諒解ニ到達センコトヲ熱心ニ希望ス然レトモ海上自由ト云フ語ハ其ノ意義余リニ曖昧ニシテ其ノ何ヲ意味スルヤニ付慎重ナル定義ヲ為スニ非サレハ右ニ関シ意見ヲ發表スルコト能ハス

尚前記軍備縮少ニ関スル宣言書ノ署名者中「セシル」卿ハ週刊雜誌「ネーション」ニ寄稿シ選挙民ハ候補者ノ選定ニ當リ其ノ所属政党ノ如何ヲ問ハス候補者ノ平和運動ニ対スル誠意ト熱心トヲ標準トスヘク若シ選挙区ニ於ケル候補者ノ平和運動ニ対スル態度略同様ニシテ右標準ニ依リ選定シ難キ場合ニハ其ノ所属政党ノ平和ニ対スル政策ヲ吟味スヘシト論シ又「レヴェュー、オヴ、レヴェュー」主筆「ウィツカム、スチード」モ同誌五月号ニ於テ略同趣旨ノ論說ヲ掲載セリ

右關係新聞切抜相添ヘ何等御参考迄報告申進ス

53 昭和4年6月(1)日

在米國出淵大使より
田中外務大臣宛(電報)

海軍軍縮の必要を強調した大統領の演説要旨

についで

付記一 五月三十日の米国大統領演説要旨

二 右に関する國務長官の声明

ワシントン

第一八九号

本省 6月1日後着

三十日ノ「メモリアルデー」ニ際シ大統領ハ「アーリントン」国立墓地ニ於テ不戦条約ノ理想実現ノ為ニハ軍費ヲ防禦ノ為ニミ使用スルヲ要ストナシ海軍軍備縮少ノ必要ヲ強調セル演説ヲ為シタルカ右演説中ニ於テ大統領ハ米國海軍ハ国防上最モ重要ナル処防禦用トシテノ海軍ハ相對的ニシテ且米國海軍ハ他國海軍ニ對シ「パリティ」維持ヲ主張スルモノナルコトハ各國ノ認ムル処ナルニ付吾人ハ右主義ニ依リ海軍縮少協定ヲ作成スヘキナリ然ルニ不戦条約署名後ニ至リテモ各主要國ハ海軍力充實ニ從事シ居レルカ國際間ノ恐怖及猜疑ノ念ヲ弱ムルニハ軍備縮少ニ依ルノ外ナク而シテ軍備縮少ト同時ニ国防ヲ完フスルニハ各國海軍力ノ比較及其ノ相對的勢力維持ノ為現認の標準ヲ発見セサルヘカラス米國現政府ハ新ナル計畫ヲ以テ本重大問題ニ當ラントスルモノナルカ此ノ際軍備制限ヲ説クコトハ制限ナル

This sacred occasion has impelled our Presidents to express their aspirations in furtherance of peace. No more appropriate tribute can be paid to our heroic dead than to stand in the presence of their resting places and pledge renewed effort that these sacrifices shall not be claimed again.

Today, as never before in peace, now life-destroying instrumentalities and new systems of warfare are being added to those that even so recently spread death and desolation over the whole continent of Europe. Despite those lessons every government continues to increase and perfect its armament. And while this progress is being made in the development of the science of warfare, the serious question arises—are we making equal progress in devising ways and means to avoid those frightful fruits of men's failures that have blotted with blood so many chapters of the world's history? There is a great hope, for since this day a year ago, a solemn declaration has been proposed by America

觀念カ從來多少効果ヲ齎ラシタリトハ言ヘ結局軍備擴張ヲ招来シ易キヲ以テ之ヲ無益ト思考スルモノニシテ吾人ノ目的ハ「リミテイション・オブ・ワード」ニアラスシテ現存ノモノヲ更ニ低キ限度ニ縮少スルニアリト述ベタリ

英、仏、伊、連盟ニ郵報セリ

(付記一)

PRESIDENT'S SPEECH AT ARLINGTON

ON MAY 30, 1929.

Fellow Countrymen : Over the years since the Civil War the Grand Army of the Republic have conducted this sacred ceremony in memorial of those who died in service of their country. The ranks of their living comrades have been steadily thinned with time. But other wars have reaped their harvest of sacrifice and these dead too lie buried here. Their living comrades now join in conduct of this memorial, that it may be carried forward when the noble men who today represent the last of the Grand Army shall have joined those already in the Great Beyond.

to the world and has been signed by 40 nations.

It states that they "Solemnly declare in the names of their respective peoples that they condemn recourse to war for the solution of international controversies, and renounce it as an instrument of national policy in their relations with one another."

They "Agree that the settlement or solution of all disputes or conflicts of whatever nature or of whatever origin they may be, which may arise among them, shall never be sought except by pacific means."

That is a declaration that springs from the aspirations and hearts of men and women throughout the world. It is a solemn covenant to which the great nations of the world have bound themselves.

But notwithstanding this noble assurance, preparedness for war still advances steadily in every land. As a result the pessimist calls this covenant a pious expression of foreign offices, a trick of statesmen on the hopes of humanity, for which we and other nations

will be held responsible without reserve. With this view I cannot agree.

But, if this agreement is to fulfill its high purpose, we and other nations must accept its consequences ; we must clothe faith and idealism with action. That action must march with the inexorable tread of common sense and realism to accomplishment.

If this declaration really represents the aspirations of peoples ; if this covenant be genuine proof that the world has renounced war as an instrument of national policy, it means at once an abandonment of the aggressive use of arms by every signatory nation and becomes a sincere declaration that all armament hereafter shall be used only for defence. Consequently, if we are honest we must reconsider our own naval armament and the armaments of the world in the light of their defensive and not their aggressive use. Our Navy is the first, and in the world sense the only important, factor in our national preparedness. It is a

powerful part of the arms of the world.

To make ready for defense is a primary obligation upon every statesman and adequate preparedness is an assurance against aggression. But, if we are to earnestly predicate our view upon renunciation of war as an instrument of national policy, if we are to set standards that naval strength is purely for defense and not for aggression, then the strength in fighting ships required by nations is but relative to that of other powers. All nations assent to this—that defensive needs of navies are relative. Moreover, other nations concede our contention for parity. With these principles before us our problem is to secure agreement among nations that we shall march together toward reductions in naval equipment.

Despite the declarations of the Kellogg pact, every important country has since the signing of that agreement been engaged in strengthening its naval arm. We are still borne on the tide of competitive building.

Fear and suspicion disappear but slowly from the world. Democracies can only be led to undertake the

burdens of increasing naval construction by continued appeal to fear, by constant envisaging of possible conflict, by stimulated imaginings of national dangers, by glorification of war. Fear and suspicion will never slacken unless we can halt competitive construction of arms. They will never disappear unless we can turn this tide toward actual reduction.

But to arrive at any agreement through which we can, marching in company with our brother nations, secure reduction of armament, we must find a rational yardstick with which to make reasonable comparisons of their naval units with ours and thus maintain an agreed relativity. So far the world has failed to find such a yardstick. To say that such a measure cannot be found is the counsel of despair, it is a challenge to the naval authorities of the world, it is condemna-

tion of the world to the Sisyphean toil of competitive armaments.

The present Administration of the United States has undertaken to approach this vital problem with a new program. We feel that it is useless for us to talk of the limitation of arms if such limitations are to be set so high as virtually to be an incitement to increase armament. The idea of limitation of arms has served a useful purpose. It made possible conferences in which the facts about national aspirations could be discussed frankly in an atmosphere of friendliness and conciliation. Likewise the facts of the technical problems involved, and the relative values of varying national needs, have been clarified by patient comparison of expert opinions.

But still the net result has been the building of more fighting ships. Therefore we believe the time has come when we must know whether the pact we have signed

is real, whether we are condemn to further and more extensive programs of naval construction. Limitation upward is not now our goal, but actual reduction of existing commitments to lowered levels.

Such a program, if it be achieved, is fraught with endless blessings. The smaller the armed force of the world, the less will armed force be left in the minds of men as an instrument of national policy. The smaller the armed forces of the world, the less will be the number of men withdrawn from the creative and productive labors. Thus we shall relieve the toilers of the nations of the deadening burden of unproductive expenditures, and above all, we shall deliver them from the greatest of human calamities—fear. We shall breathe an air cleared of poison, of destructive thought, and of potential war.

But the pact that we have signed by which we renounce war as an instrument of national policy, by which we agree to settle all conflicts, of whatever

sacrifices, our undying memory of their deeds, our emulation of their glorious example.

(中 断)

SECRETARY STIMSON'S STATEMENT.

In connection with the President's speech at Arlington yesterday in which he advocated naval disarmament and stressed the imperative character of this problem, I wish to call attention to another aspect of the same question.

The President yesterday spoke about it with reference to its direct relation to the promotion of peace and to relieving the world from the threat of war. In addition to these considerations, we do not always realize the immense material burden which is imposed upon the nations of the world to-day by the cost of the modern ships of war.

The cost is mounting with every fresh discovery in warfare. A modern capital ship costs between thirty-five and forty millions of dollars several times the cost

nature, by pacific means, implies more than the reduction of arms to a basis of simple defense. It implies that nations will conduct their daily intercourse in keeping with the spirit of that agreement. It implies that we shall endeavor to develop those instrumentalities of peaceful adjustment that will enable us to remove disputes from the field of emotion to the field of calm and judicial consideration.

It is fitting that we should give our minds to these subjects on this occasion; that we should give voice to these deepest aspirations of the American people, in this place. These dead whom we have gathered here today to honor, these valiant and unselfish souls who gave life itself in service of their ideals, evoke from us the most solemn mood of consecration. They died that peace should be established. Our obligation is to see it maintained. Nothing less than our resolve to give ourselves with equal courage to the ideal of our day will serve to manifest our gratitude for their

of the battleship of a few years ago. Even a modern 10,000 ton cruiser costs more than double the original cost of the Library of Congress.

I have in my possession a memorandum from the Director of the Budget showing the cost of the program recommended by the Navy Department in case the policy of naval reduction which the President advocates is not adopted.

That memorandum shows that the authorized and contemplated naval program for the construction of new ships alone amounts to, \$ 1,170,800,000. In addition to this enormous sum for construction there will also be required very large increases in the already large naval budget to cover the operating cost of these new ships.

When it is borne in mind that the foregoing figures involve the construction program of only one nation and that if it proceeds other nations will be impelled to follow suit, the burden of unproductive expenditure

which will be imposed upon the economic world during the next fifteen years can be to a certain extent realized.

二 英米準備交渉関係

54 昭和4年6月12日

在英國松平大使より
田中外交大臣宛(電報)

ドーズ米國大使の着任を契機とする軍縮交渉
展開への対応策準備方申進について

ロンドン 6月12日後発

本省 6月13日後着

第一九二号

「フリーバー」大統領カ「ドーズ」ノ如キ声望アリ且其ノ性格ヨリ見テ外交生活ニ入ルヲ好ムヘシトモ思ハレサル人ヲ駐英大使トシテ立タシムルニ至リタルハ海軍問題ニ依リ生シタル面白カラサル英米関係ヲ徹底的ニ改善セントスル意図ニ基クモノト思ハルル処右ノ空氣ハ英國側ニ於テモ一般ニ歓迎セラレ殊ニ「ギブソン」ノ声明以來海軍問題解決ノ好機會到来セル如ク感シ居ル様子ニテ偶々労働党ノ組閣トナルヤ首相ハ既報ノ如ク英米関係ノ改善ニ重キヲ置クコトヲ声明シ軍縮問題モ徹底的ニ進捗セシムル意図ヲ明ニシタル以來当地新聞ハ首相自ラ米國ヲ訪問シ「フリーバー」大統領ト親シク軍縮問題ヲ議セントスル意思アル旨報シ居ル位

ニテ「ドーズ」ノ着任後(六月十三日ノ予定)早晚或ル形ニ於テ予備的談合開始セラルルモノト思考ス尤モ新聞員ハ首相外相ヲ始メ事務引継後間モナク休暇ヲ取り旅行中ニテ外相ノ如キモ漸ク來週ニ至リ始メテ外交団ヲ接見スル如キ有様ニモアリ從テ如何ナル形及如何ナル時機ニ於テ談ヲ始メルヤ又果シテ首相カ米國ヲ訪問スルヤ否ヤ等ハ何レ新外相ト「ドーズ」ト会见後ニアラサレハ決定セサルヘク又交渉開始セラレテモ結局ハ専門的話トナルヘキモノナルニ付容易ニ解決スヘシトモ思ハレサルモ「フリーバー」ノ性質労働党ノ主義ヨリ見テ可ナリ徹底的ニ問題ヲ取扱フモノト思ハル就テハ我方ニ於テモ本問題ニ付各種ノ情勢ニ応シ何時ニテモ我方ノ意見ヲ述ヘ得ル様御準備アルコト肝要ナルヘシ右ハ既ニ御準備整ヒ居ルモノト存セラルルモ為念申進ス尚英米ノ商議ニ付テハ本使ニ於テモ充分当局ト連絡ヲ取ルヘキ処我方ノ主張及希望ノ要点ハ機會アル毎ニ早目ニ英米側ニ諒解セシメ置クコト緊要ナルカト存ス右当方ノ情勢御報告旁卑見申進ス